328
378




始

328-378

宮內廳書陵部

# 御撰集

第四卷

大正
5. 6. 20
購求

# 例言

本編には詠歌之大概御注一卷、伊勢物語御抄一卷、方輿勝覽集一卷、御撰千首和歌一卷、合四種四卷の御撰を謹輯せり。

詠歌之大概御注は後陽成天皇慶長十二年の勅撰にして、古來歌人の金科玉條として尊重せる、藤原定家の名著詠歌大概を詳解せられたるものなり。本書は圖書寮本を謄寫し、和田英松氏の藏本に據りて謹訂せり。

伊勢物語御抄は後水尾天皇の御撰なり。其一本の標題に「闕疑頭書也」と附記せられたれば、もと細川幽齋の闕疑抄に施されたる頭注と推せらる。本書は和田英松氏所藏の二本に據り、參照するに內閣文庫本伊勢物語勅講抄を以てせり。

方輿勝覽集は慶長年間に後陽成天皇の撰ぜられたるものにして、諸國の名所三百を選び、これが證歌千七百有餘首を類聚せらる。書名は宋祝穆の方輿勝覽によらせ給へるなるべし。本書また圖書寮本に據る。

御撰千首和歌は其奧書に斯一冊者元和帝雖有撰集之御風望依故障不被遂叡

慮自後柏原院至御在世長于此道君臣之秀歌集千首以所比撰集矣」とあるごとく、後水尾天皇撰集の叡慮おはしまして、この千首は撰ませ給へるなり。本書は内閣文庫に一本を藏すと雖も、其天保三年の奥書に「這元和帝御撰千首者智舟尼之藏書也乞得而書寫之矣可惜錯簡脱落誤字許多而有不可讀解之歌數首得善本俟後校合者也」とある如く、まことに誤脱多く、加之秋冬戀の部を闕きて、僅に春夏雜の和歌五百餘首を存するに過ぎず。されどもいま他に完本を得ざるをもて、姑くこの内閣本を收載することとせり。

大正五年五月上旬

古谷知新謹識

# 御撰集第四卷目錄


後陽成天皇詠歌之大概御注……一―一三
後水尾天皇伊勢物語御抄……一四―二四
後陽成天皇方輿勝覽集……二五―二九七

天香久山……二二七
蜻方……二二七
清瀧……二二八
神道……二二八
鈴鹿……二二九
鳥籠山……二三〇
宇津山……二三〇
信夫……二三一
十市……二三一
山田原……二三二
五十鈴川……二三二
三輪……二三二
松山……二三四
藤江……二三五
白河……二三五
音羽……二三六
水無瀨……二三七
横川……二三八
野宮……二三八
淀……二三八
蘆屋……二三九
宇治……二四一
有馬……二四二
御裳濯川……二四三

須磨……二四三
明石……二四四
北野……二四五
嵯峨……二四六
交野……二四六
天河……二四八
淡路……二四八
春日……二四九
小野……二五〇
美豆野……二五一
片岡……二五一
吉野……二五二
志賀……二五三
足柄……二五四
相坂……二五五
三島……二五六
富士……二五七
難波……二五八
豐浦寺……二五九
葛城……二五九
名兒……二六〇
中川……二六〇
並岡……二六一
嵐山……二六一
淺間……二六二
龍田……二六二
立野……二六四
小倉……二六四
戸難瀨……二六五
松浦……二六六
朝妻……二六六
伏見……二六七
廣澤……二六八
安積……二六八
滋賀樂……二六九
眞木……二七〇
大井……二七一
井手玉河……二七二





野路玉河……二七二
玉河武藏……二七三
野田玉河……二七三
伊駒……二七四
高安里……二七五
佐野渡……二七五
白河關……二七六
泊瀨……二七七
雲林……二七八
深草……二七八
六田淀……二七九
堀江……二八〇
片岡山……二八〇
高志濱……二八一
龜井……二八一
篊磨……二八一
苧生……二八二
壹岐松……二八二
住吉……二八三
遠里小野……二八四
菅原伏見……二八四
血鹿鹽竈……二八五
松崎……二八六
浮島原……二八六
鳥羽……二八七
勢多……二八七
濱名橋……二八八
武藏野……二八八
清見……二八九
高圓……二九〇
布引……二九〇
安達……二九一
活田……二九一
鏡山……二九二
佐野……二九三
大淀……二九三
竹田……二九四
水堂岡……二九四

名取川……二九四
佐夜中山……二九五
天橋立……二九五
宮城野……二九六
不破……二九六
野中清水……二九六
飛鳥……二九七
若……二九八
野島……二九八
角田川……二九九
信太杜……二九九
與謝……三〇〇
泉……三〇〇
遊廻岡……三〇一
佐保……三〇一
吹上……三〇二
有乳山……三〇三
奈古臂關……三〇三
繪島……三〇三
更級……三〇四
鞍馬山……三〇五
暗布山……三〇五
浦島……三〇六
稻荷……三〇六
田上……三〇七
昆陽……三〇七
唐崎……三〇八
因幡……三〇八
長等寺……三〇八
長柄橋……三〇九
大原……三一〇
石山……三一〇
玉島……三一一
栗田山……三一一
比良……三一一
高砂……三一一
霞關……三一二
小鹽付大原野……三一二





阿波堤……三一四
引眞野……三一五
甲斐嶺……三一五
高師……三一五
伊吹……三一六
平野……三一七
小餘綾磯……三一七
室八島……三一七
門司關……三一八
武庫……三一八
手向山……三一九
御津……三二〇
二見……三二〇
高津……三二一
阿武隈川……三二一
位山……三二一
鳴海……三二二
夏箕川……三二三
山科……三二四
熊野……三二四
由良……三二五
入佐山……三二五
松島……三二六
田籠浦……三二七
霞浦……三二七
伊勢……三二七
大江山……三二八
緒斷橋……三二九
守山……三二九
賀茂……三三〇
浦初島……三三〇
吹飯……三三一
伊香保……三三一
海路山……三三一
狛……三三一
常磐……三三一
白山……三三二
釉浦……三三四

筑波……三三四
岩瀬……三三五
蟲明道門……三三六
後瀨山……三三六
氣色杜……三三七
田簑島……三三七
鹿島……三三八
磯間浦……三三八
三室……三三八
益田池……三三九
志賀須香渡……三四〇
辰市……三四〇
八橋……三四〇
染川……三四一
有磯……三四一
許我渡……三四三
男山……三四三
布留……三四三
姨捨山……三四四
眞野……三四四
大澤池……三四五
玉江……三四五
歌方……三四八
鳴海……三四六
待乳山……三四六
生野……三四七
武隈……三四八
石清水……三四八
網島……三四八
入野……三四九
御手洗川……三四九
大江……三四九
香椎……三五〇
松尾……三五〇
鳥部……三五一
紀……三五一
園原付伏屋……三五一
三穗……三五三





三笠山……三五三
龜山……三五三
大荒城杜付同浮田……三五四
青根峯……三五四
妹背……三五五
大河邊……三五五
神山……三五六
岩代……三五六
藤代御坂……三五七
神南備……三五七
奈良師岡……三五八
貴船……三五八
桂……三五八
雄島……三五九
思川……三五九
音無……三六〇
阿太胡……三六〇
青羽山……三六一
猪名野……三六一
野洲……三六二
歎杜……三六二
吉備中山……三六三
大內山……三六三
朝原……三六四
清川原……三六四
小島……三六五
三香原……三六五
一志……三六六
薦島……三六六
櫃川……三六七
高間……三六七
木枯杜……三六八
磐手……三六八
眞野萩原……三六八
眞野萱原……三六九
涙川……三六九
芹河……三七〇
關藤川……三七〇

比叡……三七一
粟津……三七一
高瀨……三七二
木幡……三七二
三井……三七三
奈良……三七三
御前……三七四
打出濱……三七四
比治奇灘……三七四
入日岡……三七五
堅田……三七五
金御嶽……三七五
野上……三七六
八鹽……三七六
御垣原……三七六
鷲山……三七七
十符……三七七
筑磨……三七七
箱根……三七八
羽買山……三七八
木曾……三七九
橘小島……三七九
三尾……三八〇
久米道……三八〇
巢立……三八一
衣笠……三八一
紫野……三八一
今城……三八一
松賀浦島……三八二
飛火野……三八二
企救……三八二
水江能野宮……三八三
標茅原……三八三
三上……三八三
席田……三八四
石上寺……三八四
長居……三八四
印南野……三八五



那智……三八五
鷲坂山……三八五
水無能川……三八六
像見浦……三八六
寢覺里……三八七
朝倉山付木丸殿……三八七
床浦……三八七
御禊川……三八八
名越山……三八八
御船山……三八八
津田細江……三八九
朧清水……三八九
千年山……三八九

追加

橫川……三九一
芳野……三九一
三輪……三九一
小野……三九二
志賀……三九二
宇治……三九二
立田……三九三
美豆野……三九三
北野……三九三
男山又八幡山……三九四
屏風浦……三九四
蓮浦……三九四
机嶋……三九五
足占山……三九五
時浦……三九五
草刈里……三九五
衣衣山……三九五
嬰兒山……三九五
語山……三九六
鞠岡……三九六
鈴野……三九六
田中杜……三九六
眞柴川……三九六

笛竹池……三九六
片削入江……三九六
琴浦……三九七
伏猪嶋……三九七
鵜濱……三九七

後水尾院御撰千首和歌……三九九—四八〇
春……三九九
夏……四三〇
雜……四四六
作者目錄……四七七

御撰集第四卷目錄終

# 御撰集　第四卷

## 後陽成天皇　詠歌之大概御注

情以新爲先。求人未詠之心詠之詞以舊可用。詞不可出三代集先達之所用新古今古人歌同可用之風體可倣摧能先達之秀詞。不論古今遠近見宜歌可倣其體近代之人所詠出之心詞雖一句謹可除棄之。七八十年以來之人詞所詠出之詞努努不可取用之於古人詞者多以其同詞詠之。已爲流例。但取古詞詠新歌事。五句中及三句者。頗過分無珍氣。二句之三四字免之。猶案之。以同事詠古歌

詞頗無念歟。以花詠花以月詠月以四季歌詠戀雜詞。以戀雜歌詠四季歌。如此之時無取古歌之難歟。

足曳の山郭公　みよし野の芳野の山

久堅の月のかつら　郭公鳴くやさ月

玉ほこの道行く人

如此事全雖何度不憚之。

年の内に春はきにけり　月やあらぬ春やむかし

櫻ちる木の下かぜ　ほのぼのと明石の浦

如此之類雖二句更不可詠之。

常觀念古歌之景氣可染心。殊可見習者古今伊勢物語後撰拾遺三十六人集之内。殊上手歌可懸心。（人丸貫之忠岑伊勢小町等之類）雖非和歌之先達。時節之景氣。世間之盛衰。爲知物由。白氏文集第一第二之帙常可握翫。（深通和歌之心）和詞無師匠。只以舊歌爲師。染心於古風。習詞於先達者。誰人不詠之哉。

隨蒙昧之覺悟書連之古今相交狼藉無極者歟。

# 詠歌之大概

之字定家自筆の本にはなし。逍遙院說には之字あり。譬ば古今は貫之奏覽の本正本也。乍去定家自筆の本用也。貫之と云ふともそれほどに不用は連連にあらたまる故也。此等の例にて之の字後に入るを用來歟。連歌の新式も肖柏自筆といへども不可然。是も後に改めて用ふる故也。

此鈔は定家卿作と云義事舊たり。梶井宮尊快親王（後鳥羽院第七御子也云云案本朝紹運圖には第八のみこ）也依所望也。或抄に此尊快親王の年齡の時分不審也とあり。乍去從若年たづねらるる歟と云云。

詠歌之大概。詠は木也。歌は柯也。此書は諸家に種種の記ありといへども、詠の大概に悉籠也。詠は木歌は柯と云ふは、人は歌にて志をあらはし、諸木は根本の心を枝葉にてあらはす也。されば志を歌にあらはすは、毛詩の序に詩者志之所之也。在心爲志。發言爲詩。情動於中而形於言。言之不足故嗟歎

之嗟歎之不足故永歌之永歌之不足不知手之舞之足之踏之也といへり。古今の序に唐のうたといへるも毛詩の事也又法花經の分別功德品に歌詠諸如來とあり。偈と云ふも佛菩薩の歌也。然らば志のあらはるる事唐にては詩といひ、日本にては歌といひ、天竺にては梵語の偈、皆是同事也。右の毛詩の序の詞、よく歌を詠ずると云心にもかなひ、又詠歌と云二字の本據にも可然也。詩者志之所之也とは、心に在りていまだ辭の科もなく、外へいでざる所を志とす。ふつと物に感じて一念の思出來るもの也。詩は志よりおこる也。故に詩者志之所之也といへり。在心爲志發言爲詩とは、はや詞にあらはれたる所を云ふ。心之所之謂之志志之所之謂之詩とみればやすくきこゆる也。情動於中而形於言とは、情と云ふは性の物に感じて發動する者也。喜怒憂懼愛惡欲これを七情といふ。人人の上に天の賦與ふる理を得て、陰陽五常乃德をそなへて、寂然としてうごかざる所あり。これを性と云ふ。歌道も儒道も此性の理にきはまる事也。情と云ふもの胸中に發動して言にあらはるる也。ことばは心の音也。心に喜事あれば喜の言葉あらはれ、心に恨むる事あれば恨の詞があらはるる也。しかれば其あらはるる心に形が出來するほどに形の字をかけり。言之不足故嗟歎之とは、情が詞に成りて出づれども、それまでにては怨も喜も云ひとどけられざるほどに、嗟歎して句をかさねたりなどしていふ也。怨の時の嗟歎ならば、怨のこと葉をながめかし、喜のときの嗟歎ならば喜の詞をながめかす也。嗟歎をなげくと讀むとて、一方に悲事とばかり意得ては誤なり。美歎はほめてながめかす、悲歎は哀みてながめかす也。喜怒哀樂皆嗟歎有るべきなり。嗟歎之不足故永歌之とは、嗟歎すれどもいまだいひとどけぬ程に、長く聲を引きてうたふ也。詞をかさねたるばかりにてもたらざる程に、おなじやうなる句などを數多聲に文あらせていふが永歌也。咏も詠も永も同者也。いづれも詞を長くいふを永歌といふ也。永歌之不足不知手之舞之足之踏之也とは、永歌すれども其情をいひつくされぬ所にて、おぼえずしらず手がはたらき

て舞になり、足をふめば拍子になる也。喜怒哀樂の情が詞にもいひつくされぬ時、物に感じて興に乘じて自然に手足の動く所が、曲にかなひ節にかなふ處をみし也。是まで毛詩の和注了簡して書加也。又尚書虞書に、歌は永言といへり。又增韻に詠歌は謳吟也といへり。聲をながく引きて誦するを云ふなり。是歌をよむ時よく吟詠する心也。

大概は大畧大方など云ふと同事也。概はおほむねとよむ也。少概とかきてもおほむねとよむ也。又大概は大綱也。大綱も一すぢの綱にてひかるるがごとく也。天台の四教のたとへに頓漸祕密不定此四教は化義也。藏通別圓此四教は化法也。是を合せて八教と云ふ。しかるを化義の四教を大綱として、その下に化法の四教は皆よるぞといへり。然るを知證大師の授決集云、作分の物には化法の中の圓教を上に置きて、圓頓漸の三教を大綱と用ふる由あり。佛の一代の說教右の八教にもるる事なし。それはことごとく圓頓漸の三教を綱として、其下に綱の衆目はしたがふがごとしとなり。世俗に十の物を七つ八つなどいふを大概と云也。又云ふたとへば河を行くに橋なければ石をつたふ程に、する置きて越行くにわづらひなき事大概の心也。

歌道は鈔どもおほしといへども、此詠歌之大概にて相すむ也。法度おほければ作ならざる故に、後に法度などはしるがよき也。乍去法度なくては不可然。先初心の爲にはこころをゆるゆるとして、後に制の詞などをしるがよきなり。定家時分は二條家ばかり也。爲相より冷泉家もある也。歌は志よりおこる故に、日本には何事もいひ出す事皆歌也。されば古今に花に鳴くうぐひす、水にすむ蛙の聲をきけば、いきとしいけるものいづれか歌をよまざりける。此事古今にては、冷泉家にはすこしかはりあるべし。歌は神代よりあるなり。上古には長歌のみありしは、人の志あつくしていひのべられぬによりて、長歌を本とす。次第次第に人の志のなさけうすくして、卅一字を本とする也。長歌短歌旋頭混本歌色色ありといへども、卅一字專也。三

十一字は素盞鳥尊出雲の八雲の歌よりの事也。

情以新爲先。情に心意識の義あり。唐にも蘇新黄奇など云ひて、蘇東坡は詩の心をあらはしてつくれり。黄山谷は奇特なるやうにつくれり。歌の作もおなじ事なるべし。又釋に集起名心思量名意了別名識といへり。心の字ははたらかぬ心也。意の字は物の白く黑きなどを分別する所意のこころ也。識の字は巨細に草木禽獸迄の心をもしるこころなり。識の心情の字に同じき也。譬ばよるひる草木禽獸に心をつけてしるが歌也。さるにより古今にやまとうたは人の心をたねとしてとあり。

求人未詠之心詠之。注の此詞道の肝心也。人の詠ずる詞よむまじく制する也。是奇特也。歌は道のなき所にむかひて道をもとめ、およばぬ境に心をめぐらさずは、作意と云事はなるまじきと也。未詠出の詞と云ふに二つ心あり。人のかつて未讀心と、はや讀みふるしたれども、ふるめかしくとりもあげぬやうのことを、おもしろくつくりなほして用ふるとの二つ也。古今の歌に

いつはとは時はわかねど秋のよぞ物おもふことのかぎりなりける

とある歌をとりて、定家卿

いつはとはわかぬときはの山人もそらに驚く月のかげかな

秋は一しほ徒然にてあはれふかき心也。又拾遺に

我宿の梅の立枝や見えつらむ思ひのほかに君がきませる

といふをとりて、定家卿

とへかしな立枝は梅のみえずとも匂ひをこめてたつ霞かな

本歌はおもひよらざるに尋ぬるは、梅の立枝のみゆるかとの義也。然るを引かへて梅のにほひは霞にもれぬべきを、たづねぬは述懐と云義也。是が情あたらしき也。又詞不改心をぬきかふるやう連歌にもあり。

二たびは人とならじとおもふ世に　といふ前句に

ただ月にめで花にくらさむ　心敬

前句は六道輪廻を悲みて又不生やうにと也。心敬句は、人身はうけがたければ、ただ月花にめでくらさむと、心をかへて奇特也。これが心あたらしき也。又伊勢物語に、

春日野のわかむらさきのすり衣しのぶのみだれかぎりしられず
みちのくのしのぶもぢすり誰ゆゑに亂れそめにし我ならなくに

此返歌は融公の歌也、根本の心は誰ゆゑにか亂れそめにし、其方ゆゑにこそと也。それを我ゆゑにてはあるまじきが、たれゆゑぞと取替へたる也。詞は同じく心は新也。又源氏玉かつらの卷にも同じ歌の心をいひかふる事あり。心の字の心は人形の心、意識は分別の義也。

詞以舊可用。心詞もあまり隨意なればいかがの間、詞者三代集可然の義也。三代集にもきらひ詞あるなり。古今にあればとて、殘りなくちるぞめでたき、わびしらにましらなきそ、ちりぬべらなり、此類也。制の詞は三代集の後の集のことなり。いかに作意まうけても詞のあしきはいかが也。師說にいはく、人の狂氣するも同前也云云。

惣じて三部鈔を眞言にあつ。三部鈔は四度也。古今は灌頂也。あまりにめづらしき詞をいましめのため、三代集の詞用也。新古今は當代集といへども用也。其中にも人丸赤人貫之等がうたは三代集と同じ事なれば、詞以舊可用といふに違ふべからず。新古今古人の歌同とは、雖爲末集三代集の作者のはとるべきといへる心也。歌をみだりがはしくあらせじとの爲なるべし。定家歌には制の詞すくなし。是は古詞をまもる故也と云云。

月やあらぬ春やむかしの春ならぬ我みひとつはもとのみにして
むすぶ手のしづくに濁る山の井のあかでも人にわかれぬるかな

此風體よし。定家卿口傳に心は新く、詞はふるく、心は直く、詞は艶にとあり。口傳口傳也。風雅集序に、あるひはすがたたかからんとすれば其心たらず。詞こまやかなれば其樣いやし。艶なるはたはれ過ぎ、つよきはなつかしからず。此道理なににもわたりておもしろきといひつたへたり。されば秀歌

は最上なれば難儀也。堪能の先達にてなくしてよみあつる歌もあり。されどもそれは手本にならざるなり。先達も毎度秀歌もならざるなり。秀歌の體奥に百余首あり。稱名説に歌は誠の道に叶ふを本とせり。基俊俊成定家家隆寂蓮此人を學ぶべしと云云。又中務卿宗尊親王の歌の風體あしきにつきて、御身をつつしまれよと爲家つねにいさめし也。はたして世に用ひられずなりて世をうれへ給ひし時、

虎とのみもちひられしはむかしにて今は鼠のあなうよの中

東方朔が語に、用之則爲虎不用則爲鼠と云語をとれり。

をしからぬ深山おろしのさむしろに何の命のいくよひとりね

此歌などくさりあしきと也。俊成卿云心はありとも詞をかざらぬは又あしきと也。爲家は心はふるくとも詞つづきのよきを歌の一體といへり。先達之所用新古今古人歌同可用之。此注は詞以舊可用といふ所にきこえたり。

風體可倣堪能先達秀歌。不論古今遠近見宜歌可働其體

此詞第一也。前の詞にかはりて遠近をいはず、ただいづれの集又いづれの作者にてもよからんすがたを見てならふべきと也。風體のあしき體はいかがといはば、雨中吟十七首也。未來記は後世をかがみて也。其雨中吟の中にも、

またれ行くひかりもおそき月よりも雨によこぎる荻の音かな

うちしめりすすきのうれ葉おもりつつ西吹く風になびく村雨

ほしもなく雲間もみえぬ雨のよに猶またるるは山のはのそら

うちしめりは風雅に入也。定家の訓そむく也。金葉詞花は風體あしきなり。爲兼卿風體あしくよみなせるを、頓阿歌の風體あしきをよみなほす事は、伏見院へ爲兼指南申されしと也。其身は勿論なれども、天子に其御心もちなければ無詮とて、後普光園攝政までよりより申入被達叡聞、それより此方風體なほりたるよし也。雨中吟は雨の晴れぬやうに物むつかしき體也。

たとへば毛詩に、治世之音安以樂。其政和。亂世之音怨以怒、其政乖（そむけはなり）といへるに同じ心なり。さるにより必歌の風體あしきはとなへにくきもの也。又よく心得られ侍るうたにも、風情の過ぎたるといふ也。

秋風によひの村雲はやければ出でにし方にかへる月かな

此歌雨中吟の心なるべし。定家の撰はいづれも實多し。されば新古今はあまりに歌面白くて實すぐるよとて不叶心中之由也。雖然家隆有家雅經等の撰者なれば、一人のままにもならざるゆゑに、百人一首はこれによりて被集たる也。哀傷の外いまいましき歌よむ人の風をよくつつしめと也。俊成卿述懐の百首よまれしにも、面にはいまいましき心なかりしと也。

近代之人云云。七八十年以來之人云云。

七八十年とはいづれの時分ぞなれば、順德院の時分より前七八十年たるべしと心得べき也。天治大治の時分なるべし。然らば崇德院の時節より此かたの人の歌たるべき歟。則制詞の歌の作者の時代なり。此七八十年以來といふに、二條家と冷泉家とちがひあるなり。冷泉家は此鈔など講談すれば、其當日より七八十年と心得ておく也。當流不信用事也。制の詞は、うつるもくもる、はなの露そふ等重ねてよむ事制する也。手がらをおもふゆゑ也。

又近代の人のよみ出す詞一句もとるべからずとは、雅經が啼く音もよはのとよみたりしを、家隆がつゆのぬきよはの山風と讀みたり、似たりと定家難ぜしと也。一字一句も耳にたつやうなる事はのぞくべき事也。又雅經はよき歌人にてありしを、後京極の攝政のいはれけるは、雅經は人の歌をとるとありしを、さもあるまじきとおもひしに、建暦の詩歌合の時、有家末の松やまずこととへと讀みしを、評定の時など一段感せしを、同年七月に五首の會有りしに、足引のやまず心にかかりてもとやがてよみたり。無念の事也。同前の歌人さへ同事はあしきに、まして無下に初心の輩は、一字一句も耳にたつは讀むまじき事也。順德院御製に

甲斐がねは山のすがたも埋れて雪の半にかゝるしら雲

とあるを、京極の黄門、山の姿建保のころ秀歌として聞えきと注したる也。

これは家隆卿歌に

櫻花さきぬる時はかつらぎの山のすがたにかかるしら雲

といふ歌の事也。基定朝臣、

涼しさに秋風ちかくなりにけりまたたちかへる衣手のもり

入道民部卿、秋風ちかくは近世の歌かと云云。新勅撰に、

しら露の玉江のあしのよひよひに秋風ちかく行く螢かな

かやうの事よくよく避くべき也。又八雲に入ほがと云ふを第四に立られたるなり。是はあまりにめづらしきことをよまむとする程に、をかしきことどもおほくきこえたる也。

わかの浦を松の葉ごしにながむれば梢によするあまの釣舟

これらは木のまよりみえたる體さも有りぬべし。舟のうちより月やいづらむ、是等わろき也。あまりの事にや、又あるものの歌に、女郎花につゆのおきたるを、

女郎花おく白露の色かへて花には黄玉葉にはあを玉

此體いかがと也。入てもあまの月やみるらむ、これらも同前也。又氷と云題にて、今出川近衛局被語云、故大納言子ども歌よませしに、伊通卿(イ)覺道上人實伊僧正等也。わが身は九才也。各うす氷とある間、厚氷とよみたりしを、大納言興に入りて思也。果して歌よみ也。

於古人云云。

古人のうたは同詞にてよむ事多し。

萬葉 足曳の山櫻戸をあけ置きてわがまつ君をたれかとがむる

定家 足曳の山櫻戸をまれにあけて花こそあるじたれを待つらむ

後撰 年ふればわが黒かみも白川のみつわくむまでなりにけるかな

定家 年ふればわがくろかみも白絲のよるは佛の名をとなへつつ

二句之上三四字免之とは是等也。

あし曳の山のはいづる月待つと人にはいひて君をこそまて

山のはにしばしまたれよ夜半の月出でなばいはむ言のはぞなき

さびしさにやどをたち出でながむればいづくもおなじ秋の夕暮

秋よただながめすてても出でなまし此里のみの夕とおもはば

小夜更くるままに汀や氷るらむとほざかり行くしがのうら波

しがの浦や遠ざかり行く波間より氷りていづるありあけの月

心あらむ人にみせばや津の國の難波わたりの春のけしきを

霞み行くなにはの春の曙にこころあれなと身をおもふかな

いづれも本歌をとるの證例也。又取て惡きもあり。

山河に風のかけたるしがらみは流もあへぬ紅葉なりけり 列樹

山川に風のかけたるしがらみの色にいでてもぬるる袖かな 家隆

此歌定家卿本意ならざるよし申侍ると云云。此家隆卿の歌定家卿心にかなひ侍らぬよしは、二句の上三四字これをゆるす。猶これを案せよとあり。

二句の上とは、足曳の山ほととぎす、玉ほこの道行く人などのたぐひの詞ならば、二句の上三四字是をゆるすと也。此山川にかせのかけたるといふ詞は、一ふしあることを、二句の上四字とられ侍る不可然也と云云。

以同事云云。以花詠花云云。

花をよみたらん本歌にて、やがて今の歌に花をよみ、月も又同然の義は無念と也。定家の時分にもままあり。

てりもせずくもりもはてぬ春のよの朧月夜にしく物ぞなき

大ぞらは梅のにほひにかすみつつくもりもはてぬ春のよの月

月みればちぢに物こそかなしけれ我身ひとつの秋にはあらねど

ながむればちぢに物おもふ月に又我身ひとつの嶺のまつかせ

石上ふるの山邊のさくら花うゑけむ時をしる人ぞなき

石上ふる野のさくらたれうゑて春はわすれぬかたみなるらむ

たびねして妻ごひすらし時鳥神なび山に小夜ふけてなく

おのが妻こひつつなくや五月やみ神なび山のやまほととぎす

如此類ありといへども也。さて、

四季を云云。

萬 我宿のむめさきたりと告げやらばこてふににたりちりぬともよし

古 月夜よし夜よしと人につげやらばこてふににたりまたずしもあらず

萬 朝日かげにほへる山にてる月のあかざる君を山ごしにして

朝日かげにほへる山のさくら花つれなくきえぬ雪かとぞ見る

本歌をとるは此分可然。但以戀歌詠戀歌ずる事もあれども、先此分に可心得也。是迄は先歌よむべきの心也。

あし引の山ほととぎす　みよし野のよし野のやま

ひさかたの月のかつら　ほととぎすなくやさ月

玉ほこの道行く人　如此事全雖何度不憚之。

これは右にいへるごとく、二句の上三四字ゆるすと見えたることばなり。

年のうちに春はきにけり　月やあらぬ春やむかし

さくらちる木のしたかぜ　ほのぼのとあかしのうら

如此類雖二句更不可詠之。

これは一句も努努不可詠と見えたり。制の詞などいへるたぐひなるべし。

又云如此詞共いかほども侍るべけれども、四首の詞をいだすは大概のこころ也。

常觀念古歌景氣云云。

景氣とは風體と云義也。古歌とは寛平以往の歌などの事なり。古今伊勢物語とあるは、伊勢物語は時代前なれども、古今を第一におく歌道の奥義に依てなり。後撰よりさきに伊勢物語を置くは、ふる物語なれば後撰よりは先におく也。又古今は花實相兼たる集、又伊勢物語は花の過ぎたるもの也。さて後撰は實過ぎてあれば、伊勢後撰にて花實又相兼たる故といふ說あれどもそれは不用。右にしるすごとく用る也。惠心僧都は、和歌は狂言綺語

のことなれば、觀念のさまたげ也と初はありしが、石山に參詣して侍りしに、ある人湖水に舟の行くを見て、

世中は何にたとへむ朝ぼらけ漕ぎ行く舟のあとのしら波

と吟ずるを聞きて、後にはよく歌よむと也。

月草に衣はすらむ朝露にぬれてのちはうつろひぬとも

此歌は道心者の心にあひかなふべき也。又袋草子に、俊頼のみ折ふしにかなひたる歌を詠ずるは、讀むにまされるなり。前齋宮歸京の時、供奉人舟中にいねずしてある間に、時鳥一こゑ鳴きたり。萬人新しき歌をよまばやとおもふ時に、女房の聲して

淀のわたりのまだよふかきにいづかたに鳴きて行らむ郭公

と吟じたる、人人感歎して、わすれがたかりけると也。

殊可見習者。

と云ふは、諸道の才覺なくば歌道はなるまじきと云義也。廣く學び、古事來歷に心をつけて、才覺を專とせんが肝要也。俊成はちと文字なし。定家文字あり。爲家定家の餘慶ある也。爲氏は法度など相違あり。爲相より冷泉家とわかれたり。爲氏は兄、爲相は弟、爲家子也。爲相は阿佛四條局の腹なれば爲家の愛子と云云。阿佛美女の故となり。爲氏は二條家、爲相は冷泉家と、此時冷泉家はじまる也。爲家おき文今に相傳となり。普光園攝政のいはく、漢才はきはまりありとも、和歌はきはまるまじきなり。習と云心は、禮記の月令に鷹の學習すと云。鷹が子を生みてそだつる時、餌食也をかくる度に、必巣のまはりを三匝す。然して巣の上にて、或は物にあひ、或は風に向ひて、飛ぶべき羽を無盡につかうて見する也。雛鷹が巣の中にして是をよく見て、我もあのごとく飛ばんと思ふは學也。後に巣をたちて親鷹の如く羽をつかひ鳥をとるは習也。これを學習と云也。習の字は親鷹が白日に巣を三匝してみせならはすによつて、羽の字の下に白の字をかけり。又は下に日をかく心は、日をへてならふゆゑに羽日と云心也。さて卅六人はいづれも歌人

なるに、人丸貫之忠岑伊勢小町等の類とあるは、大概と云心也。此類の字は、口傳故切紙にて相傳ある事也。又或人の聞書に、惠雲院 植家公 說とて、類の字は基俊俊成顯輔清輔等にわたるべきよし也と云云。分別ある事也。宗祇云卅六人内にこの類あるべしと可意得。さて相傳の人數在りて、おそらくは世に存知人不可有之云云。又古歌といひても、萬葉などの異想なるは無用と也。

雖非和歌之先達云云。

この時節の景氣と云肝要也。春夏のうつる體、時時の其景氣を、學者の心をつくべき也。よるひる、或寒暑をわきまへ、心をつくべき也。凡歌人は、何の景氣もみえぬやみのよにもこころをつくべき也。されば家持、

かささぎのわたせる橋に置く霜の白きをみればよぞ更けにける

如此霜夜などの曉のそらの景氣なるべし。月落烏啼霜滿天といふ心也。又時節の景氣とは、何事にも心をつけて時宜を心によくかくべきと也。是も一義あり。たとへば古今に、人の前栽に菊にむすびつけたる歌、業平、

うゑしうゑば秋なき時やさかざらむ花こそちらめ根さへかれめや

此歌は、秋なからむ時やさかではあらむ。花は散るとも又秋にならば、根はあるべき事なれば、いつまでもさかむと祝したる心也。如此の歌ぞ時節の景氣を心にかけたるなるべし。又仁和御門芹河の行幸の時、御狩也 行平卿老年まで六十九才 鷹がひに侍りければ、わが身のうへをわかやかに出立て、かりぎぬに鶴をすりたれば、それによせて彼卿、

翁さび人なとがめそかり衣 ふばかりとぞたづも鳴くなる

とよまれ侍れども、主上も五十七才にて御年たけさせ給へれば、我御上のことに思食とがめて、御けしきあしかりけりとなむ。是時節の景氣を知侍らぬなるべし。是は風雅の道ならず、萬事にわたりて覺悟あるべき事也。

世間之盛衰云云。

或はさかんなるものもおとろへ、又おとろへたるものも再さかんなる事、

學者心をつけよと也。又白氏文集和歌の心に作分よく通ずる也。第一第二の帙とは、第一の帙に七卷、第二の帙に七卷なり。合十四卷也。第十二卷の感傷の部の四卷に歌行曲引の內に、長恨歌琵琶行あるなり。長恨歌に漢皇重色とあり。唐の世の事なれば唐皇とあるべきを、時節の景氣時宜を思ひて、漢の世をかりて漢皇とかくなり。帙とは竹にて簾のやうに編みて、うらを絹にして、端を錦金襴などにてする也。一つつみ一つつみにする書衣也。握翫とはもてあそぶ心也。又盛衰とはかなしむべき時は悲むが本意也。撰集にも哀傷の部あり。奏覽なくてもかなはぬ事なれども也。これ世間の盛衰ことのよしをしらむが爲也。或抄に、もののよしをしらむが爲と、定家卿かなにかきて誰人やらむにつかはすと云云。然共道遙院以來ことのよしとよむ也。よみやうはいづれにてもあれ、萬物の上は能能了別せでは、歌の道はなるまじきこと也。稱名院一說に、雖非和歌之先達とは、白樂天は和歌の先達にあらざれども、文集をみよといふ說もあり。

和歌無師匠。

此詞無師匠といひて、又以舊歌爲師とあるは相違のやう也。宗祇云、景氣を師匠とせよと也。又此詞祕事なり。但詞を先達に習外には、師匠なしといふ心なりと、先面には心得べし。さて祕と云ふは、此冊の初の詞に、情以新爲先と侍るにて、師匠なしとは知るべし。あたらしき事は我心と思案し出すべき事なれば、師はあるべからず。人の心をたねとしてとあれば、我心の外に別に師はなし。心をあたらしく思案をめぐらし、さて舊歌の風體を見ならふべしとなり。詞を先達にならはばとは、詞にはしられざる事おほし。それをばならはずしてはいかがしるべきにや。

染心於古風云云。

かやうにあらば、誰の人か詠せざらんやといへり。詞のごとく作意も師匠にならはば安かる事なれども、それは我心よりいづる故に、心を古風にそめとはいへるなり。前の詞に舊歌をもて師とすとは、萬葉をさきとして寬

平御歌合三代集までをいふべきにや。又和歌に無師匠と云ふに、
山ふかみ落ちてつもれる紅葉ばのかわけるうへに時雨ふるなり
能因法師は、此歌にましたるわかの師匠は有るまじきと申ししと也。此事は安嘉門院四條阿佛口傳の書にあり。

秀歌之體大略。

秀歌は際限なけれども、大略此百餘首にてかくぞと云心也。大略は大概といふと同じ心也。

隨毫昧之覺悟云云。

毫は稱名院說に八十九十をいふ也と云云。昏忘の心也。昧もくらきとよむ字也。又昧はほれたる心也。又意行などはかうむると云字を蒙昧とかくべしぼるるとはわろきよし申と也。

古今相交云云。

尊快親王へ時宜の詞也。又はさなくともあるべき也。

又詠歌の大概よみて後に、前三首をよむといへり。あながち三首にかぎるべからざる事なれども、先如此いひならはしたり。ことごとく讀事はまれなる事也と云云。

壬生忠岑泉大將定國隨身九十餘歲迄アリ忠衡子

春たつといふばかりにやみよし野の山もかすみて今朝は見ゆらむ

拾遺卷頭

此の歌は平貞文家の歌合の歌なり。拾遺集の卷頭なり。歌のこころはよし野の山は在所からいまだ寒く雪などふかくあるを、かすむかかすまぬがほどにあるは、春たつといふばかりにやと云ふ心也。三體詩に十日菊の詩に、

節去蜂愁蝶不知　曉庭還遠折殘枝

自緣今日人心別　未必秋香一夜衰

これら一夜にはおとろへまじけれども、人の心ゆゑおとろへたるかとなり。芳野山も一夜にはかすむまじいなれども、これも心ゆゑかすみてみゆる也。萬事何の上にも左樣の事はあるもの也。此歌を天地人にあつるよし也。春たつと云ふを天にあて、芳野山を地にあて、みゆらむといふを人にあつると云云。又公任卿の九品の歌えらびしときに、此歌を上品の上にあり。

又卷頭にも定家撰するうへは、秀歌の言語道斷の體なり。又源の道濟十體をたてたるにも、此歌を最上とせり。とりわき吉野山は春をつかさ花などの在所なれば也。さてよし野は故郷にてすてられたる所の、春のくるをしらぬ在所ながら、春の光のあまねく廣大なるを云ふなり。然は故郷なれば我身によそへて、下の心は昇進の心にまかせざる事も含めり。又此歌を、ある人堯孝にたづねたるに、至つて面白き心は何ともいはれぬ境也といへり。

光孝天皇（仁明第三の御子也在位三年）

君がため春の野にいでてわかなつむ我衣手に雪はふりつつ

古今の前書に、仁和御門みこにおましましけるとき人にわかな給ひける御歌とあり。此歌は有心體の御歌也。又無心體といふもあり。心の殘るを無心體といふ也。又ことばのたらぬとは別なり。定家撰はいづれもふまへのつよきを本とする也。さて所は春の野、つむ人はみこ、此餘寒をしのぎて若菜をつみ給ふは、君も長久に、萬民もゆたかにとの義也。かやうに辛勞ありて人を思ひ給ふゆゑに、天道にかなひて位につき給ふ也。宗祇注に、雪はくるしみのかたへとる也。又人日の菜羹は寛平の時分からなり。又古事談に云ふ、陽成院御邪氣大事御座之時、依不御坐儲君、昭宣公親王達のもとへ行廻つつ見事體給ふに、他の親王達はさわぎあひて或裝束し、或圓座とりて奔走しあはれたりけるに、小松帝御許にまゐらせたまひたりければ、（于時式部卿上野大守）やぶれたるみすのうちに、緣やぶれたる疊に御座して、本鳥二俣に取りて、無傾動氣ましましければ、此親王こそ帝位には即き給はめとて御輿を寄せたりければ、鳳輦にこそのらめとて、葱花には不乘給りけりと云云。又一だんに小松帝親王之間、多借用町人物、御即位之後各參內責申、仍納殿物併被返與云云。かやうの事どもも皆仁孝にして、諸人を慈愛の御志ゆゑとみえたり。猶くはしく百人一首の抄にしるす。

讀人しらず

萬新古
梅が枝になきてうつろふ鶯のはね白妙にあわ雪ぞふる

はね白妙にあわ雪のふるは、うづもるるにてはなし。羽に雪のかかりたる體也。さて鳴きてうつろふは、毛詩、出自幽谷遷于喬木と云ふより也。冬の間は蟄して居たるも、春になりて楚忽に梅にうつりきて鳴きたるうぐひすの羽に雪のかかる也。友などもとめて鳴出づる也。

柿本人丸

古今拾遺
梅の花それとも見えずひさかたのあまぎる雪のなべてふれれば

此歌古今には冬にあり。拾遺には春の歌にあるなり。それともみえずと云ふ所に心をつけて見るべき也。梅を雪の降りうづむにては興なかるべし。うす雪のなべてふれれば、雪も梅もおなじ色なればいづれともなくおもしろきを、それともわかずといへり。又親句の歌、疎句の歌とてあり。此歌は疎句の歌なり。この儀は委くは古今相傳にあるなり。さてあまぎるとはそらのうすくひかりて、きらきらと雪のふるてい也。天霧とかけり。きりすこし立わたりて、そらのうすくもるやうに降る體也。

棚霧合雪もふらぬか梅の花さかぬばかりにそへてだにみむ

うちきらし雪はふりつつしかすがに我家の園にうぐひすなくも

うちなびき春さりくればしかすがに天雲霧合ゆきはふりつつ

顯昭は是等の歌の詞皆同じ心也といへり。定家はあまぎるあま雲霧あひ又一同也といへり。萬葉に空きらし雪もふらぬかいちじるく是又同心也。皆此心よりといへり。是も定家卿說也。又或相傳の秘鈔に、あまぎると云ふは聳と云字をよめり。後漢書に云、山風晴急雪聳天といへり。この歌は人丸減疾にひえの西坂本にて、人丸此をよむと成實卿の夢にみえたりし歌也といへり。これ他流の說歟、信用に足らず。人丸の歌の中にも言語道斷のあぢはひの深き歌也。

貫之

古人はいさこころもしらず故郷ははなぞむかしのかにほひける

貫之集には昔初瀬にとあり。古今にはかきかへたり。はつせにまうづるごとにやどりける家に、久しくやどらでほどへて後いたれりければ、かの家のあるじ、かくさだかになむやどりはあるといひ出して侍りければ、そこにたてりける梅花を折りてよめるなり。いさは不知とかく也。さるほどに歌にはかならずいさといはばしらずとよむべきなり。連歌にはいさとばかりもあるなり。詞短故なり。さて歌の心は、故郷人の心はかはりたるもいさしらず、花はむかしのごとくの匂ひにてこそあれと、さだかになむやどりはあると云ふにあたりてよめるなり。故郷は初瀬へまゐる時の宿坊をさしていふ也。猶百人一首の鈔にくはしく注する也。

貫之

古櫻ばな咲きにけらしもあしびきの山のかひよりみゆるしら雲

古今の前書に、歌たてまつれとおほせられしときによみてたてまつれるとあり。幽玄の體晴の歌なり。山のかひとは峽と云字なり。ただ白雲の山のかひよりみゆるは、はなのさきたるよとうちむきたる體なり。或抄に云ふ、定家は水のおつる所を山のかひといへりと云云。ただ山の間なり。葦引の山とは枕詞と心得べきなり。萬葉第二に

足日木乃山之四付二妹待跡吾立所沾山之四附二

と云歌の注に、山をあしびきといふに四義あり。一には三方の沙彌が惡日に山をこえけるに、大雪にあひて道をうしなひたりける時、

あしびきの山路もしらず白かしの枝もたわわに雪のふれれば

と詠じければ、あしをひきたるゆゑに足曳といふ也。二には推古天皇山に入りてかりし給ひしに、御足にくひをふみてなへぎてひき給ひけるより、山を足引と云ふ、日本紀に見えたりと云云。三には天竺に一角仙人と云ふ仙人、額に一の角あり。鹿の足あり。通力はあれども雨ふりて山のみちのすべりけるに、たふれてあしをそこなへり。あしをひきしによりてあし曳といへり。委見智度論第十七云云。四には昔天地さけわかれて日本土埆いま

だかたまらざりし時、人みな山にありけり。とかくありきけるに跡のいりければ、日本を山あとといひき。やまとといふこれ也。山へおりのぼりするは、足をひくに似たれば足引といふ也。第四の義をもちふべしといへり。されどもことのおこり樣樣に見えたり。うるはしくあまたの義共云ふに不足。山を足曳と云事は、やと云ふはたかき義、まといふはほむる義、まどかなりと云詞也。かくる事なくととのほりたるをまどか也と云。しかるに山齊といふ木ことにさかえたる木なり。此木昔筑紫におほかりけり。ことにさかゆる木なるがゆゑに、萬葉第七卷の歌には、あしびなすさかえし君がほりし井のとよそへよめり。山はたかくまどかなれば、山をいひいでむとする諷詞に、足曳とおけるなり。あしびと云木なればあしびきと云ふたとへば櫻をさくら木ともいひ、かしはを柏木ともいふがごとし。然ば山齊とかきてやまと訓ずるも此義也。一段の祕事としるせり。又此歌を顯昭が云ふ、あしびきは山の異名なり。山のかひとは山の行あひを峽といふ也。足引の事或は惡日來、すさのをの尊山にいりたまへりけるに、深雪にあひてあしき日きたりとの給ふ也といへり。或足曳、是はすさのをのみこと山に入りて狩したまふに、くひを踏みて足をひき給ふ故といふ。此等の說日本紀にこそあるべきに不見者也といへり。是前の說と少差別あるゆゑに、同じことながら注するなり。又定家卿、右の顯昭が說を批判して、山峽說說あるべからず、あし引のこと此等說たれも申置たり。久かたあし引など云ひて、かくつづくこと今はたどり知るべからずとぞ侍りし。足曳などよむ人侍るなれども、ただ葦引とのみ申されよといへり。又或鈔に、國信清輔は大友皇子かりするとて白鹿の足を射たりしが、足を引きてはしりけるより足引といへり。又或鈔には、雄畧天皇かつらぎ山にて狩したまふとき、足をつきてともいへり。定家卿說葦引と書くと云ふにつきて前の祕鈔に口傳ある也。

新古 百敷の大宮人はいとまあれやさくらかざして今日もくらしつ

一本には此歌十首めにあめるもあり。萬葉には

百礒城の大宮人はいとまあれや梅をかざしてここにあつめり

とあり。野遊の部に入るなり。ももしきを、逍遙院はももしぎと濁りてよめり。稱名院はしきと清て也。兩氏の清濁ままの事也。稱名院はすむかたへなり。逍遙院は濁るかたへ也。さて歌の心は正月二月までは種種の公事政に隙なきも、三月になりてすこしいとまを得てゆうゆうとしたる時分なれば、大宮人の櫻をかざしてなぐさむ體なり。げふもくらしつとは、今日も今日もくらしつといふ心なり。百敷は百官の座を敷くによりて云ふと云云。宗養鈔に、稱名院說に百敷は內裏なり。百官の屋敷あるによりてなりと云云。

俊頼朝臣

金葉 山ざくらさきそめしより久方の雲井に見ゆる瀧のしら絲

源太政大臣の歌合とあり。朝夕ながめ馴れたる山なれども、花のさきぬれば一入興をそへたるなり。宗祇注には、滿山のはなの折節はさながら雲井より瀧の落つるやうなるとなり。花を待つゆゑ、山を明けくれながめて、かすかなる瀧をみいだしてある上に、又瀧のそひぬるは花のさきたるよとみたる體なり。或說に、花の瀧と心得たるはよからず、花の雲のごとくにみえたる中に落ちたる瀧なれば雲井にみゆるとよめりと云云。稱名院說には、はなの咲きそめしより、瀧ははるかになりて花はまぢかくみゆるとなり。

後鳥羽院太上天皇

新古 さくら咲くとほ山どりのしだりをのながながし日もあかぬ色かな

釋阿九十賀を給はりける時、うしろの屏風の御歌なり。釋阿は俊成の事也。櫻さく時分永日にも此興はあかじとなり。八九歌の

足曳のやまどりの尾のしだりをのながながしよを獨かもねむ

を取給ひて也。さて下の心は、俊成は御師範ゆゑ齡長久との御心なり。又御自贊の歌と見えて、時代不同の歌合に具平親王の歌につがひ給ひし也。

命あらば又もあひみむ春なれどしのびがたくてくらすけふかな

此歌のつがひ也。又說云ふ、さくら咲く遠山とは九十(ぢそ)をつづけ給へるといへり。當流に不用之云云。

西行法師(圓位法師西行が本名也)

おし(千)なべて花のさかりになりにけり山のはごとにかかるしら雲

此歌は丁簡してよめる歌に引かへて、やすやすとつくろはずして、ありのままみえたる所をよめる也。山のはごとにかかるは、おしなべて花のさきけるよと也。誠になまみなくつくろはず奇特也。

素性法師(古今此二字なし)

いざ(古)けふは春の山邊にまじりなむくれなばなけの花のかげかはうりん院のみこのもとに、花みに北山のほとりにまかりにける時よめる

とあり。此いざは友などさそふこころ也。又我心をもさそふこころ也。くれなばなけとはくれぬとも此花のかげなかるべきかといふ心也。しらぬ山路にてもなく、所は雲林院なり。みこは仁明の御子、常康親王也。可然所なれば木の本に下ふしをせむとなり。山にまじりてはなをも見春をもしたはむと也。異說になげと濁るといへり。當流不用之。

よみ人しらず

櫻(拾)がり雨はふりきぬおなじくはぬるとも花のかげにかくれむ

櫻がりとはかりはもとむると云心也。たけがり櫻がり紅葉がりおなじ心なり。いもがりゆけば冬の夜のとは、いもがりは妹がもととい(がり)ふ心也。許とかくなり。是は別なり。たけがりはくさびらをもとむる心なり。歌の心はぬるとも花の陰に立よるべきとなり。花を大切にもとめたる體一段おもしろき也。

小野小町(說說あれ共後成恩寺は良實子と云云)

花の色はうつりにけりないたづらに我みよにふるながめせしまに

此歌おもてむきは、花をみむみむといひて油斷したるまに、雨ふりてえみぬと云心也。又我身のとしよりたるを、はなのすがたなれども、一日一日とながめたる間に年もよりたるといふ心なり。小町が古今にて第一の歌なり。此歌はにの字四あれども耳にたたぬ也。宗尊親王三百首に、

白雲のあとなき峯にいでにけり月のみ舟も風をたよりに

爲家卿詞云、にの字あまた指合歟。小町花の色は是は秀逸故何事歟と云云。或鈔にわがみよにふると云ふは、我世中をふるいとまに、花もみずしてちりぬるといふ也。國信は、我みよとは、小町宮づかへひまなかりし時なれば、我御代にふると云ふ也。一本相傳の祕鈔に、心はただ我身のおとろふる事を、花の色によそへいへる也。我身よにふるながめせしまにとは、さらでもよにふるはと也。かくやと物思ふならひなるを、殊に好色の身なれば、世をも人をもうらみがちにて、打ながめて明けくるるに、おとろふることをなげく心也。又ながめを、爲氏は霖雨といへりとなり。又或鈔に、好色の身なれば、世をも人をもかこちなどするこころある也。それをおもひ返してよめり。うつろふ花をうちながめて、わがみの衰へたるを、はなによせて述懷したる心なり。古今序に、あはれなるやうにてつよからず。いはばよきをうなのなやめるところあるに似たり。つよからぬは女の歌なればなるべし。一本の鈔に、此歌は一二句肝要也といへり。百人一首の鈔にたがひにす。又師說に云、花時風雨多といふ心也。

俊成卿皇太后宮大夫

新古 またや見むかた野のみ野の櫻がり花の雪ちるはるのあけぼの

所はかた野、春のゆうゆうとしたる時節、花の景氣言語道斷なるを、又やみむとは、又やみむ又やみざらむといふ心也。家隆卿の歌に

またやみむまたやみざらむ白露の玉おきしける秋はぎのはな

とあるを、定家卿心には俊成歌にはおとりたるとの事也。又やみむにて又

やみざらむはこもるものをといふこころなり。或鈔に、仍覺說に良辰美景賞心樂事この四ととのふ事大切なり。これを四美備といふ也。此歌は御狩の會席と見るべしと云云。又或鈔に、今の景は四あり、曙と花と雪と交野と也。いづれも所がら境地面白と也。又或鈔に、宗祇

またやみむ花に朝露夕霞　と云云

紀友則

古久かたのひかりのどけき春の日にしづ心なくはなのちるらむ

花やちるらむと有るべきを、花のとあるは、ひかりも、長閑にゆうゆうとあるに、いかがとしたる事に花のちるぞといふ心なり。口傳にはゆうゆうとしたる春に、しづ心なくなど花のちるぞといふ義なり。らんとただはむざとはねにくき也。此歌はなどと云詞を心にもつ疑にてはねたる也。此などの詞口傳云云。猶此上の口傳百人一首の切紙にあり。猶又此歌の注も百人一首の鈔委くあり。

攝政太政大臣

新古明日よりはしがの花園稀にだにたれかはとはむ春のふるさと

花の比故郷を云出しての體也。春さへとはぬ故郷を、春より後は誰かはとはむとなり。此故郷は春殿の故郷になしてみる也と宗祇注にあり。

持統天皇御歌

新古春すぎて夏きにけらし白妙の衣ほすてふ天のかぐやま

萬葉には衣さらせりとも、又衣ほしたりとも點したり。此歌春過ぎて夏きにけらしといへる勿論の事にて、よろしからず聞え侍るやうに、しらざる人はおもふべきにや。此歌更衣の歌也。其故は、天のかぐ山は天照太神岩戸に引籠られしも此山也。されば高山と心得べきなり。高山にて春の間はかすみふかくおほひかくしてそれとも見えぬが、春過ぬれば霞も立散じて夏のそらに、此山さだとと明白にみゆるを、白妙の衣ほすとは云ふ也。ほすと云ふもさらせりと云ふも衣の緣語故也。いかでか明白にみゆればと

て、白妙の衣とはいふぞと云人あり。春は霞の衣におほはれたる山、其霞の衣をぬきたるやうなれば、白妙の衣とはいへり。されば春過ぎてと云ふも、夏きにけらしといふも、皆用に立ちて大切詞也。百人一首の抄に委く注する也。

俊頼朝臣（イ本也後拾遺には相摸とあり不審）

（後拾）みわたせば波のしがらみかけてけり卯花さける玉川のさと

五文字にみわたせばとおく事むつかしき也。是は山城の玉川の里にて也。卯花のべうべうと開きたる體也。大方の垣本などならば流行べきと也。ことごとく卯花也とみたる也。晴の歌の體也。後朱雀院皇女正子内親王の繪合し侍りけるかねのさうじにかき侍るとあり。同時此番の歌、

うの花のさける盛は白浪の立田の川のゐぜきとぞみる　伊勢大輔

皇太后宮大夫俊成

（千）五月雨はたくもの烟うちしめりしほたれまさる須磨のうら人

此五文字さみだれはと云ふは、五月雨の比はと云心なり。五月雨の比は燒火もかすかなるべきとおもへば、燒そへて煙も立つべきを、雨ゆゑうちしめりしほたるる浦人の體也。火のもえかぬる心也。仍覺說に、海士のけぶりなどはせうせうにはしめるまじき事なれども如此と也。幽艶の歌とみるべしと云云。又或鈔に、

五月雨は日數ふれどもわたのべの大江のきしはひたらざりけり

是はたださみだれはとあるてにをはなり。

西行法師

（新古）道のべのし水ながるる柳かげしばしとてこそたちとまりつれ

極暑の時分水邊の柳かげにすこしの間たちとまりたれば、極暑をさけて時剋のうつるをも打わすれたると云義也。しばしの程こそと思ひつるに、納涼の地在所から求めたるやうなる故、おぼえず日をくらしたるとなり。こそといふにてよく聞えたる也。堯孝法印自筆の本には、立ちとまりけれ

とありけれにても心は同じ事なれども、つれを用也。朕東坡の三の卷を管窺すれば、譬如倦行客中路逢清流と云句みあたりて自愛云云。

藤原清輔朝臣

新古 おのづから涼しくもあるか夏衣日もゆふぐれの雨のなごりに

此あるかは哉と云義也。いづれもかは哉也。それも又所にはよる也。暑氣やうやう夕暮になりて日もかたぶく時分、雨さへくははる故おのづから涼しきと也。夏衣ひもとは、衣のひもによせたる也。おのづから涼しきに雨ゆゑいよいよの心也。

皇太后宮大夫俊成

千 いつとてもをしくやはあらぬ年月を御禊にすつる夏のくれかな

一剋千金といひて、光陰の過ぐるをば四時ともにしたふ物なるに、何とてながしすつるぞと也。夏は火秋は金にてあるによりて、火こく金と云ふによりて祓すつる心也。暑氣のはなはだしきをば誰もながしすてたきもの也。宗祇注にはなほ年月をすつるとあり。又祓にしたる具をも河へながしすつる也。

安貴王

拾 秋立ちて幾かもあらねどこのねぬる朝けの風は袂すずしも

この寢ぬるはただねぬると云心也。秋來てやうやう朝けの風もすずしき時節の景氣也。いく日もあらねど秋ゆゑ早風も涼しく袂もおぼゆると云義也。朝けは稱名院などは朝げ夕げとて、食事の事をもいへり。此歌は朝明也。

郭公けさのあさけに鳴きふるを君きくらむかあさいやすらむ

朝明のかすみの衣ほしそめて春立ちなるる天のかぐ山土御門院

恵慶法師

拾 八重むぐらしげれる宿のさびしきに人こそみえね秋はきにけり

詞書に、河原院にあれたる宿に秋のくるといふ心を人人讀みけるにとあ

り。歌の心は融公のさかえ給ひしも夢になりて、秋は昔のごとくかはらずきたりぬと云義也。貫之歌に

とふ人もなき宿なれどくる春は八重葎にもさはらざりけり

昔はかやうのもある也。今は等類といふべし。或鈔に、貫之が歌よりは其哀猶もふかかるべしと云云。

寂然法師

秋はきぬとしも半に過ぎぬとや荻ふく風のおどろかすらむ

荻の風にそよめく音にて、秋もきて年もなかばに過ぎぬるよというて、光陰のうつりやすきを身のうへにおどろく心也。東坡が秋懷の詩

苦熱念西風　常恐來無時　及茲逐凄凛　又作徂年悲

西行法師

あはれいかに草葉の露のこぼるらむ秋風たちぬみやぎ野のはら

西行は諸國をあるきたるものなれば、我宿の庭に秋かぜのあらく吹くを見て、此比はみやぎ野の露も景氣もしげき時分なれば、この風にさぞと思ひやりたる心なり。みたるところなれば時節の風景おもひいだしてよめる也。又此歌に二義あり。一には宮城野を歷覽して秋風のあらく吹きたつをみて、故郷の草菴などの露いかにこぼるらんとよめるといへり。又一には前に注する義也。殊に宮城野はつゆふかきところなれば、此秋風にさぞ散らむとおもひやりたる也。此說を本とす。宮城野にての說は或說也。宗祇云、哀は大畧愛する心也。霞をあはれみと云ふも愛する義也。あはれとやいはむあなうとやいはむも愛する心也。又あつばれといふ心もあり。又人をあはれむ心もあり。此歌は愛する義也。

大江千里

月みればちぢに物こそかなしけれわが身ひとつの秋にはあらねど

日は陽氣なれば、日にむかへば心もゆるゆるとやはらぐ也。月は陰氣なれば、みるに心もすみてあはれもそふ也。秋のあはれは我身ばかりにかぎら

ねど、天下みな我身ひとつのやうにあると云義也。千千とはことのおほくものかなしきと云心也。愁といふ字も秋の心とかくも、秋はおのづからあはれふかき心也。鴨長明の歌に

ながむれば ちぢに物おもふ月にまた我身ひとつのみぬの松かぜ

とよめるも此心なり。又朗詠に大底四時心惣苦就中腸斷是秋天といへり。或又燕子樓中霜月夜秋來只爲一人長といへる心もある也。猶百人一首の鈔にくはしくしるす也。

新古 故郷のもとあらの小萩さきしよりよなよな庭の月ぞうつろふ　攝政太政大臣

此歌は月前草花といふ題也。故郷のものかなしきに、萩もさきて月なども面白きに、又萩もうつろひ月も有明になりて、本の故郷になるよと也。本あらは古枝に花のさきたるをいふ也。萩も月も秋もやうやううつろひ行くを、よなよな庭の月ぞうつろふと也。面白き景風也。

千 あすもこむ野路の玉川はぎこえて色なる波に月やどりけり　源俊頼朝臣

玉川の名所はいづくもある也。井蛙抄の第四に、同名の名所の所に委くみえたり。まぎれある事なり。此玉川は大略近江とみえたり。歌枕などに色色沙汰あり。なほ勘へて決すべし。さて歌の心は、萩こえてとは、萩のはなのさきみだれて玉川の波にうつりたる色が、月のかげにみれば、さながら波の萩の下枝をこゆるやうなると云義也。萩を波のこゆる體、月の色のうかべる景氣、所がら言語道斷の事也。興に乘じてあすもこんあすもこんと云義なり。又の説に、まづ立かへりてあすも又きてみむとおもひなぐさめたれど、此景氣の言語道斷なるに今日さへかへりがたきと云心也。又云此五文字肝要也と云云。

新古 ながめつつおもふもさびし久方の月のみやこの明けがたのそら　家隆朝臣

ながめつつとあるは程へたる心也。惣別つつと云詞はいづれも程をへたる義也。又稱名院仍覺說に、此つつと云詞は夜をかさねたる義也と云云。さて歌の心は、先當意は曉がたの事也。ながめはよひから終夜の義也。月のいづるときは景氣も盛にあるも、落月の時節になればあはれも自然とうかむ心也。月の明がたの景氣は、人も寢しづまり世間もれいれいとしてある程に、月宮殿までも心におもひやりたる義也。又或說に、秋の月の隈もなく侍るをみて、姨捨更級を初として天下の事は申に及ばず、月宮殿までおもひやれる心なるべし。

太上天皇

新古 秋の露や袂にいたくむすぶらむ長き夜あかずやどる月かな

袂にいたくはつよくといふ心也。仍覺說に、いたくは傷字也と云云。是もつようと云心也。身に物がつよくあたればいたむ心也。さて長夜あかずは、終夜事外に御涙のひまもなうつもりたる也。三光院說に、後鳥羽院を關東よりはからひ申たる事を御無念に思召ての御涙也。時節は秋也。月の感といひ、御涙の無隙體也。又萬民をあまねくおぼしめす御心の御涙なりと云云。宗祇注に感の深き御歌と云云。

讀人不知

古 鳴きわたる雁の涙や落ちつらむ物おもふやどの萩のうへの露

秋のものかなしき折節、萩の上における露をみて、我心に秋のかなしみの侍れば、おけるつゆも秋の涙かと覺ゆる折節に、雁の鳴きわたるをきけば、いとどあはれもそひてみえ侍れば、雁も我ごとく涙おとして、はぎの上の露とや成ぬらんと心を述ぶる也。大方の露とは替りたる故如此よめる也。景風の歌也。三光院說に、

心ざしふかく染めてしをりければ消えあへぬ雪の花とみゆらむ

此歌のこころにてよく義理あふと也。此事又或鈔に逍遙院說にもあり。然者累代の說也。又雁のなくと云ふによせて涙とよめるは歌の餘情也。雁鶯

には涙をよみつけたる也。其外は作例次第也。

讀人不知

萩が花ちるらむ小野の露霜にぬれてをゆかむさよは更くとも

小野は名所にはあらず。是も月前に萩を愛したるなり。ひめもすにみくらして、夜の更くるまで花に執心の有故、よるなりともみつべきと也。たとひ露霜にぬれてなりともみたきに、ましてやうやうちる時分にもなる程に、いそぎて見ばやと也。此歌讀人不知とはあれども、猿丸太夫歌なり。家集には女のもとへと言葉書にみえたり。下の心は、かかる折節にぬれぬれも行きたらば、我おもふ人なども哀とぞおもはむずるとよめり。下は戀の歌ながら大方は秋の歌也。さて露霜と云事に說說あり。先露じもと云事非說也。露と霜と二つ也。可用之。顯昭が云ふ、露霜とは古抄に秋の霜を云ふとあり。有本文、露結爲霜（私云千字文にあり）と云心也。萬葉に露霜のけやすきいのちと詠に舉兩物歟。不審也といへり。然るを定家卿は他門には露じもとよみて霜まじりなる露と申歟。庭訓には露霜とて兩種を云ひつづけたりと存ず。むすばぬほどは露也。結べば爲霜各別歟。萬葉十一に

ゆけどゆけどあはぬいもゆゑ久方のあまの露霜にぬれにけるかも

又ぬれてをゆかんとはぬれてゆかむ也。をはやすめ字也。

天智天皇御製

秋（後撰）の田のかりほの庵のとまをあらみわが衣手はつゆにぬれつつ

一說には刈穗、又一說には借菴也。たとひ刈穗なりともかりをといふやうによむがよき也。宗祇注の分也。惣別むかしの歌はかさね詞多くある也。露たぶたぶとおきたる體也。萬民を御あはれみの心ありて農業の事までおぼしめしやりたる體也。もり捨てたる田の菴に露のもり入りておく如くに、百姓のうへまでも御慈悲の涙のふかきと云義也。百人一首に巨細注する也。

後撰 白露に風の吹きしく秋の野はつらぬきとめぬ玉ぞちりける

眼前の體也。ひろき野の千種百種の上に所せきまで置きわたしたる露に、俄にあらき風の吹きみだしたる景風を含めてみれば、一段おもしろき歌也。吹きしくと云ふはあらく吹くと云義也。又はしきりに吹くと云心也。

藤原清輔朝臣

千 立田姫かざしの玉の緒をよわみみだれにけりとみゆるしら露

露のらんまんとおきたる體をみて、立田姫のかざしの玉かと也。立田姫は秋をつかさどり、さほ姫は春を領する也。姫といふよりかざしと緣語にていふ也。天人などは必瓔珞のかざりあるなり。

西行法師

千 白雲を翅にかけてゆく雁の門田の面の友したふなる

雲の風にふかれてある折節、雲井にとほく飛行く雁の、門田の友をしたひて鳴體也。是は人は位たかくなりぬれば青雲天上に行くがごとく、何事もおもひなきままに、むかしの友もわするるに、雁は雲井はるかに鳴きゆけど友を不忘心奇特也。面は雁の事ばかりにいひて、うらは人事に比していへる也。

讀人しらず

後撰 秋風にさそはれわたるかりがねは物おもふ人の宿をよかなむ

雁のこゑをきけば秋のあはれに猶おもひもますほどに、よきてなけよといへる心也。

夏山になくほととぎす心あらば物おもふ我に聲なきかせそ

此歌の心也。秋はうれへふかき心、又は一心にて萬人の上をおもひやりたる體也。心をつけて見れば秀逸の歌也といへり。

式子内親王

新古 千度うつ砧のおとに夢覺めて物おもふ袖の露ぞくだくる

いかなる物も此砧うつ聲にては夢のさむべき也。秋のよに物をおもふ身

なれば、增してうちおどろかされて物かなしければ、袖のつゆもいよいよちりくだくる也。くだくるとは袖よりはらりと多く落ちてみだるる心をいへり。仍覺說に、八月九月正長夜千聲萬聲無了時このこころにて、わがおもひのやむ時なきといはむ爲也と云云。五文字より詞たしかにして感のふかき歌也。

大貳三位

はるかなるもろこしまでも行く物は秋のねざめのこころなりけり

秋のよの明けやすくね覺かなしくさびしき故、あらぬ心もうかぶ程に、しらぬもろこしまでもおもひやりたる心也。秋來只爲一人長といへる心にかよふ也。

おもふことまだつきはてぬ秋のよのね覺にまさる鐘の音かな

これらも其心ひとしき也。

經信卿

夕されば門田のいなば音づれてあしの丸やに秋風ぞふく

田家秋風と云事をよみたる歌也。丸屋はあしばかりにて作りたる家なり。まろき家にはあらざる也。ひるは寂寞たる田家の、夕になれば門田の稻葉にそよそよとあきかぜの吹くかとおもへば、そのまま蘆の丸屋におとづるる體をいへり。夕されはゆふべになりきたればといふ義もありと云云。夕ぐれ夕され大畧は同意也。すこしは差別あり。宗祇注に、近比は春され夕されこのましからずとなり。

寂蓮法師

さびしさはその色としもなかりけりまきたつ山の秋のゆふぐれ

まきは深山にある木なり。さびしさは何ゆゑとあらはるれば、結句それゆゑなぐさむ事もあるべき也。

山ふかみ槇のはしのぐ雪をみてしばしはすまむ人とはずとも

などいへるも其色あるゆゑ也。秋は自然とさびしくあるに、所は深山槇た

つあたり、時は秋の夕なれば、何色とはなくしんしんれいれいとさびしき體也。又云ふ、さびしきとは物のおとろへ零落したる體をもいふ也と云云。

式子内親王

新古 それながらむかしにもあらぬ秋風にいとどながめをしづのをだ卷

秋風はむかしも今もそれながら、ふけども、我心のむかしにあらぬよし也。是はすこし年たけての歌也。又宗祇作の分葉には、をだまきの一説に奥山にかれてたてる木をもをだまきと云ふ也云云。ただをだ卷は苧をいやしき女のうみて卷きたるを、をだ卷ともへそとも云ふ也。くりかへして物をおるゆゑにくりかへすとつづくる也。又下女の所作なればいやしきもとつづけ、又しづのをだ卷ともいへり。此歌は伊勢物語の歌を下畧しての心也。一段妙なる體也。

いにしへの賤のをだ卷くりかへしむかしを今になすよしもがな

年たけぬればむかしを今にとよみ給へり。又或鈔に

月やあらぬ春やむかしの春ならぬ我みひとつはもとのみにして

といふを、下心の本歌にしてよめりといへり。又同鈔に

をぎの葉にむかしはかかる風もなし老はいかなる夕なるらむ

などともよめりと云云。又顯昭が密勘に注する歌、

おく山にたつをだ卷の木綿襷かけておもはぬ時の間ぞなき

又四條大納言歌に、

一たびはおもひこりにし世中をいかがはすべきしづのをだ卷

是も身を卑下したる心にて、賤のをだ卷と聞えたり。曾丹歌に、

をだまきは朝げのまひき我ごとや心のうちにものやおもひし

よろづのことに兩説あれば、始めて一説に定むべからずといへり。然るを定家卿しづのをだまきの事所存如此とあり。顯昭説と同前也。

文屋康秀

古 吹くからに秋の草木のしをるればむべ山風をあらしといふらむ

此歌は古今の中にも詞たくみ也といへり。山風をあらしといふ事は當流に不用之。むべは尤也。吹くからは、ふけば則と云心也。家集には野邊の草木とあり。あらしといふらむは、山風のあらく吹くを尤あらしといふらんといふ心也。猶百人一首の抄に委く注す。

人丸

新古 さをしかの妻とふ山の岡べなるわさだはからじ霜はおくとも

秋の田の色づけば先門田からかるもの也。それゆゑに此早田をかりたらば鹿のたちどをうしなはんずる間、早田をからじとは鹿のなくねをあいしての心也。田はかるが本意なれどもあいしたる心殊勝也。

よみ人しらず

古 奥山に紅葉ふみ分けなくしかの聲きくときぞ秋はかなしき

此歌おく山といへる所尤以肝心なり。秋ふかくなる時分深山の陰をたのみてふかく入る也。秋はかなしきは世間の秋也。きく人にかぎらぬが秋の感ふかき也。

立田山梢まばらになるままにふかくも鹿のそよぐなるかな

この歌の心也。秋もくれがたに成り、鹿の打わびてなく時分、秋のいたりてかなしき心也。此の秋は世上の秋也。聲聞く人にかぎるべからず。されば餘情かぎりなきにや侍らむ。此歌はいづれの先達の說にか、月やあらぬ程の歌にこそと。

菅原朝臣

古 秋風の吹上にたてる白菊は花かあらぬか浪のよするか

事書に、寛平御時せられける菊合に、すはまをつくりて菊のはなうゑたりけるにくはへたりける歌。吹上の濱のかたにうゑたりけるをよめるとあり。此吹上は紀州の名所也。吹上は秋風よりのつづきなり。色色に分別してみれども、菊か波かと分別しがたきと菊を愛してよめる也。か文字はうたがひなり。

はるる夜の星か河邊の螢かも我住方のあまのたくひか

此類也。又云、此下句は菅家之詠の風體也と定家申しこと也。

凡河内躬恒

心あてにをらばやをらむ初霜の置きまどはせる白菊のはな

をらばやをらむはあらましの重詞也。菊のさきいでたるは無類におぼゆるに、又霜のおきたる朝ながむればひとしほあはれなれば、霜と菊とをならべて愛したる也。委くは百人一首の鈔にしるす。

貫之

白露もしぐれもいたくもる山は下葉のこらず色づきにけり

もる山とあるによりて下葉のこらずとはある也。必先梢よりそむる也。露時雨のかかる所から色をみするなり。いたくはつよくといふ心也。一說にはさびしくと云義なり。守山は近江國也。稱名院說に、しぐればかりならば下葉までも染むまじきを、露のもるゆゑに下葉のこらぬとはいへりと云云。

柿本人丸

立田川もみぢながるる神南備の三室の山に時雨ふるらし

たつた川は御室につづきたる名所也。奈良御門萬葉集えらませられたる時の御代の歌也。此ゆゑに古今にもとりわけての歌也。紅葉の色こきをみて、みむろのしぐれはいかほどにあるぞとおもひやる體也。一說にこの時雨は木葉也といへり。用ふべからず。或祕鈔に、此歌は神龜三年十月九日聖武天皇立田河に行幸ありし時の事也。人丸御供しての歌也といへり。又此五文字あすか川ともあり。又或抄に、紅葉の色ふかく散敷く立田河にながるる景氣をみて、さて三室山に時雨ふるらしとおもひやりたる也。紅葉する事は時雨の能作なれば、ちることも又しぐれのさそふらんと、河の上に散りうきたるを見てよめる也。又或祕抄に、此歌上下をいひくださずしてならべて心得べし。此歌を古今にあててみる習あり。猶古今相傳の抄に注云。

す。同じ事ながら少しの差別ある故又注す。或祕抄に、立田川の水にごりて落葉をながせるをみて、さては河上のみむろの山にかきくらし時雨のふるぞと、爰にはふらぬしぐれをおもひやりたる也。嵐の吹くに時雨のふらぬことは侍れども、時雨のふるにあらしのそはぬ事はなかるべしと也。又此歌を、家隆はみむろの山にあらし吹くらしとあるべき由也。然るを定家卿のいはく、心あさくも侍るものかな。時雨にてこそ侍らめと申されけるとなん。是は前に注する說故也と見えたり。

古秋はきぬ紅葉は宿にふりしきぬ道踏分けてとふ人はなし
よみ人しらず

秋はきぬといふはつきぬと云心也。宗祇注には行きぬとあり。時節は秋のつくる比なればさまざまにうち侘びたる體也。せん方もなくさびしき心也。三光院說に、秋はきぬは去の字の由申と照高院准后道澄相傳也。それにても心は同じき也。又或祕抄に、秋はくれ紅葉はちり人こぬ也。此をりのかなしきをばいひ出すして、心にもたせたるところ感ふかき歌也。又或相傳の祕抄に、此歌の心は、かなしむ秋の姿は我宿を懇に尋ね來て落葉となれり。可尋人は落葉をふみ分くる事もなしと也。此說可也。又一の抄に、秋はきぬとは秋はいたりてかなしき時分哉。秋のくる頃より次第にうき事も移り行きて、はや長月さへ末つかたのさびしきに、とひくる人もなしと歎息したる心なるべし云云。稱名院などは秋の去る時分也。爰をことわりて事とふ人もなしといへるなりと云云。

業平朝臣

古茅葉破神代もきかず立田川からくれなゐに水くくるとは

前書に、屏風の繪にてよめるとみえたり。歌の心は、秋の暮又神無月などの時分、龍田川の水もみえぬほどに紅葉の散りしく間、紅に水くくるかと也。神代には神變奇特なる事のみありけれども、か樣の事はきかぬよし也。惣別なりひらは心あまりて詞たらぬとあれども、此歌は心も詞もよく叶ひ

たる間、小倉山庄の歌にも入るなり。猶百人一首の抄に巨細注す。

春道列樹

山川に風のかけたるしがらみはながれもあへぬもみぢなりけり

此歌は志賀の山越にてよめる也。心は水の行方もみえぬほど木葉ちりかかり散りかかりするを、風のしがらみとよめる也。山と川との眺望を愛しての心もあり。その時は山川に風のかけたると、川の字すみてよめるといへり。此説不用。又あへぬは隙もなくちる心也。猶是も百人一首の抄にくはしくしるす。

源信明朝臣

ほのぼのと有明の月の月かげに紅葉吹きおろす山風のかせ

此歌かくれたる所なし。詞のつづけがらなり。新古今の冬部の歌なり。月の月かげ例の重詞也。誠其體無比類侍る餘情也。三十四字はべれども、おほくあまりたるとはきこえざる也。仍覺説には、家集には内の御屏風の歌とあり。

太上天皇

ふかみどりあらそひかねていかならむまなく時雨のふるの神杉

景氣はかくれなし。しぐれのふるとつづきたる秀句の詞也。

時雨のあめまなくしふれば槇の葉もあらそひかねて色づきにけり

萬葉にあり。此歌の心なるべし。松杉などは不變の、いかにふるともあらそひまけまいなれども、かやうにふらばいかならむとなり。萬葉にあらそひ不勝とかけり。かねては不堪忍のこころなり。

西行法師

秋篠やとやまのさとやしぐるらむ伊駒の嶽に雲のかかれる

あきしの伊駒つづきたる名所也。伊駒の嵩へ雲のかかるをみて時雨ぞするらむと也。此秋篠やのやや文字は心なし。いづくにても不苦也。里やしぐるらんのやの字はおさへたる疑の字也。或抄に、彼在所は大和河内山城三ヶ國

のさかひに侍りと云云。

清輔朝臣

冬枯(新古)のもりのくち葉の霜のうへに落ちたる月の影のさやけさ

秋はいまだ木葉もちり殘りて、木陰はすこし影の隈もありし也。冬枯になりて月のかげあらはにみゆるなり。古文眞寶後赤壁賦に、霜露既降木葉盡脫、人影在地仰見明月。此古語よくあひたる也。又西行の歌に、

小倉山麓のさとに木葉ちればこずゑにはるる月をみるかな

これも同じ心なるべし。落ちたる月は入方にあらず、木葉の上にうつる心也。

清輔朝臣

君(新古)こずばひとりやねなむ篠の葉のみ山もそよにさやぐ霜よを

篠はかならず深山にあるものゆゑ、ささの葉のみ山と云ひつづけたる也。さやぐはさえたる體也。一段寒き夜は、霜のふるにも篠なんどの葉はさよ



さよとさやぐやうにきこゆる物也。かかる夜をさてひとりやねなんとうちなげきたる體也。稱名院說に、舊友などを待ちわびたる心也。

さかしらに夏は人まね篠の葉のさやぐ霜夜をわがひとりぬる

此歌をうちかへしてよめる也。

攝政太政大臣

片敷(新古)の袖の氷もむすぼほれとけてねぬよの夢ぞみじかき

冬のよの事外さむきに、涙さへ氷りてあれば、とけてねぬにつけて夢がみじかき也。詞のつづき一段面白き歌也。

人丸

矢田(新古)の野に淺茅色づく荒乳山みねの淡雪さむくぞ有るらし

やたの田の字すみてよむ也。矢田の野もあらち山も越前の名所也。やたの野をとほりて、冬がれの淺茅をみて、あらち山の雪をおもひやりたる體也。

歌の景氣からびて面白也。

讀人しらず

古故郷は芳野の山しちかければひとひもみゆきふらぬ日はなし

よし野をふる郷と云ふは天武天皇の皇居なる故也。一說にはならをいふともいへり。或祕抄にいはく、一度も皇居になりたる處をば、いづくをも故郷とよむ也と云云。顯昭云ふ、故郷とはすみうかれたる里也。又あからさまにたちはなれても本の家をも云ふ也。又住みながら年久くなりてやぶれたる家をもよめり。此ふる郷とは吉野の宮也。又み雪とは深雪也と云云。然るを定家卿尤有興以之可爲指南云云。さて歌の心は、よしのは山ふかきによりていたりてさむく、冬も雪の早くふる也。又春もおそく消ゆる也。さる程に、其近き里にても雪のふらぬ日はなしといへり。又照高院准后私說として申されし宗牧發句に

五月雨は山ちかしてふみ雪かな

とありぴとひもみゆきふらぬ日はなしといふ詞より案じいだしたる者也と云云。

讀人しらず

古今よりはつぎてふらなむ我宿のすすきおしなみふれるしら雪

時分うつりかはり、萬の草のかれはてて、薄ばかり折殘りかれたちたるに、淡雪のふりかかりたるを感じてよめる也。降と云字二つあり。上古は如此もありしなり。さておしなみは、萬葉に押靡とかけり。これによりておしなびかすと云義あり。不用之。ただうちなびきて隱れぬほどの雪なり。枯立ちたる薄に雪のうすうすとふりたる景氣おもしろければ、相續けて如此又もふれと下知したる義也。ふかくふりたる雪にてはなき也。

やかずとも草はもえなむ春日野をただ春の日にまかせたらなむ

此歌のたらなむといふも下知也。此心也。もえなむはもえぬべしと云心也。

坂上是則

古朝ぼらけ有明の月とみるまでによし野の里にふれるしら雪

この在所の眺望の歌也。里にふれといふ所肝心也。山ならばふかくあるべきを、里ゆゑうすき雪といふ義也。月も有明になれば光うすくなるほどに、うす雪にまがひたる景氣殊勝也。猶百人一首の抄にあり。

攝政太政大臣

新古 石上ふる野の小篠霜をへて一よばかりにのこるとしかな

是は序歌也。畢竟は一夜ばかりといはむ爲也。石上ふる明神は大和也。石上といふはふるといはむ爲、ふるとは霜といはむ爲、小篠とは一夜といはむ爲也。除夜の歌也。歳暮よりは又別也。一日にかぎる也。又石上ふるとは、昔此川にて女の布をあらひけるに、水上に劍のながれくだりけるがあたる所、土石草木たまらず切れたるに、此布にまとはれて留たりけるを、耶りて神といはひたりければ、そこに一夜に杉生えたりけるを神杉といへり。但此說はさる事ながら、石上はふるといふ枕詞也。さるによりて石上ふりにしなどとよめり。さて歌の心は、一年のうつるははるかなるやうなれど、ほどなくて、星霜を經てただ一夜になれるとおどろく心也。

民部卿經信

後拾 君が代はつきじとぞおもふ神風やみもすそ河のすまむかぎりは

稱名院說に、此歌は賀の歌也。承暦二年內裡の歌合によめりと云云。祝言の歌などに、かやうの面白き歌はまれにあるべき由、定家卿賞美ありしと也。詞くさり又たけたかく奇特也。みもすそ川のすまむ限とは、天照大神君と臣とのちかひありてより、限もなく日月反し、天地はいかに成るとも、守護あるべきとの義也。正風體の歌なり。

僧正遍昭

新古 末の露もとのしづくや世中のおくれさきだつためしなるらむ

十如是の內の本末究竟等の義也。おくれさきだつ世中の體眼前にてあはれなる體也。家集に世のはかなさ思ひしられしかばとあり。又古今の序にある六人の內なり。後鳥羽院定家へ、此六人のうちはいづれにて有べきよ

し御尋也。定家卿答に遍昭とあり。又の仰に、まことすくなくはいかがとあり。それを歌とは申也とあり。

僧正遍昭

古皆人は花の衣になりぬなり苔のたもとよかわきだにせよ

古今の詞書に、深草のみかどの御時に藏人頭にてよるひるなれつかうまつりけるに、諒闇になりにければ、さらに世にもまじらずして、比叡の山にのぼりかしらおろしてけり。其又のとし皆人は御服ぬきて、あるはかうぶり給はなどよろこびけるをききてよめるとあり。歌の心は此前書にてきこえたり。遍昭は深草御門仁明天皇御目をかけられたるゆゑかしらおろしたる也。苔の袂とは墨染の袖也。せめてかわきだにせよと侍る、誠に哀に侍る者也。猶百人一首天津風の歌の前に注す。

和泉式部

諸共に苔の下には朽ちずしてうづもれぬ名をみるぞかなしき

金葉の詞書に、小式部内侍うせて後、上東門院より年比給ひけるきぬをなきあとにもつかはしたりけるに、小式部内侍とかきつけられて侍りけるを見てよめるとあり。きくぞ悲しきと有るべきを、見るぞとあること奇特也。名の書きつけたるをみて、猶今更のやうにかなしきとなり。あはれふかき體也。歌の心は詞書にてきこえたり。

道信朝臣拾遺にはけふぬぎ捨つとあり

拾限あればけふぬぎかへつ藤衣はてなき物はなみだなりけり

詞書に恆德公の服ぬぎ侍るとてとあり。けふとは一回忌の事也。父の服衣も日月にかぎりある故ぬぎすてたれども、なみだはかぎりなきとなり。尤哀深き歌のさまなり。又藤衣とは服衣をも云ふ。又いやしき衣をもいふ也。

太上天皇

新古おもひいづる折たく柴の夕けぶりむせぶもうれしわすれがたみに

是は慈鎮和尚の母うせたる時あそばされたる也。天子のうへにてもする

ずゐの事までをも思召故也。後學の爲也。おもひいづるときはの山の岩つつじとあるごとくに、おもひいづる折とうけられたる也。哀傷の御歌にうれしきとあるは、ひきかへられて尤哀ふかき故也。慈鎭の返歌に

おもひいづる折たく柴と聞くからにたぐひかなしき夕烟かな

とあり。或抄に、此御歌は女御后にもわかれさせ給ひての事にや。慈鎭和尙へつかはされたるとあり。不可用之。宗祇は慈鎭母うせての事としるせり。又或人の抄に、後京極攝政うせたまひて後鳥羽院御歎あさからず、いかなる歎も月日ふればわするるならひなるを、此別はおもかげもたちはなれずと勅定ありと云云。今一首御製、

ながむらむおなじそらより時雨きて山里ならぬ袖もぬれけり

といへり。未決なり。慈鎭同時の歌に又、

木葉ちるおく山里に住居して心と物をおもふころかな

といへり。不足信用也。

太上天皇

新古なき人のかたみの雲やしぐるらむ夕の雨に色はみえねど

是も前の御歌と齊しき心也。かかる御愁傷の千萬行の御涙を雨に比して也。雨中無常といふ題也と云云。しぐるらむしをるらむ雨說也。師說にはしをるらむを用ふる也。夕べの雨に色はみえねども、亡魂の雲といふ事のあれば、無人の雲も亡象の雲により時雨侍るか、その色にはみえねどかく哀もよほすはと侍る心なるべし。一說にいはく、我も人も妄執の身也。無人の形見の雲也。わがそでぬらせとしをるらむ。我も又其人をおもひてこそなみだもかきくらしぬれと、兩方取合せてあそばされたるにやと云云。又山谷の注に、朝爲行雲、夕爲行雨といふ本說あり。相逢相失兩如夢、爲雨爲雲今不知。

行平朝臣

古立ちわかれいなばの山のみねに生ふる松としきかば今かへりこむ

いなば山は美濃因幡の國の兩義なり。百人一首の抄にくはしく注す。さてこの歌は俊成卿のいはく、あまりくさりすぎたるよし難じて、さりながら今かへりこんとのところにて、のびて幽玄なるよし褒美せしと也。待人だにあらばかへりこんずれども、まつ人のあらじといふ心をよめる也。

貫之

白雲の八重にかさなる遠にてもおもはむ人に心へだつな

八重にかさなるは遠き心なり。稱名院説に、遠に三の心あり。かしこといふ心、外といふ心、とほき心三也と云云。又は八重とは八度八百萬の神八千世、いづれもおほき心也。おもはむ我にとあるべき所を、人にと大樣に公界へいひたる事おもしろき也。たけある歌也と云云。或抄に、平あつ行がみちの國へ下るの時よめるといへり。

在原行平朝臣

わくらはに問ふ人あらばすまのうらにもしほたれつつわぶとこたへよ

詞書に、田むらの御時に事にあたりて津の國すまといふ所にこもり侍りけるに、宮のうちに侍りける人につかはしけるとあり。事にあたるとは罪にあたる事なり。さて罪にあたる子細は、天安二年大嘗會に中納言藤原師茂、座の上下に論ありしに、冠を打落したりしによりて被流なりといへり。一には文德帝御心のかよひし但馬內侍といふ人に、行平密通せしときなどがさるるといへり。其時の歌也云云。甚以謬説也。又一には中納言朝行の讒奏にて流罪せられしといへり。是又彌以用ひざる説なり。宮のうちの人は娘の四條后也。わくらはには邂逅とかけり。たまさかなる也。さて歌の心は、如此の身なればたづぬるものはあるまじけれども、もしたまさかにもとふ人あらば、もしほたれてわぶとこたへよとの義、あはれふかき歌也。田村御門は文德の御事也。わぶとこたへよと云ふに、めを和布とかけばそのころにて侍るなど云義あるが、あさましき説也。曾て不可用云也。

菅原朝臣

古 此たびはぬさも取あへず手向山もみぢのにしき神のまにまに

朱雀院のならにおはしましける時に、手向山にてよめるとあり。是は醍醐朱雀の朱雀院にあらず、宇多の天皇の御事なり。花鳥餘情にいはく、朱雀院は後院なり。天子脫屣ののち御在所なり。三條朱雀に四町に造られたり。延喜の御宇には宇多の御門を朱雀院と申侍りと云云。此たびは旅の字度の字いづれも同意ながら、度の字よきなり。供奉なれば私をかへりみず、幣をもささげずして、紅葉の山にみちみちたるをそのまま手向也。又後撰に、

折つればたぶさにけがるたてながらみよのほとけに花たてまつる

この歌の心におなじき也。猶百人一首に注す。

皇太后宮大夫俊成

新古 難波人あし火たくやに宿かりてすずろに袖のしほたるるかな

あしびたくやに宿りて、海人のやどなればあはれもふかき體也。すずろは心ならずといふ義也。そぞろおなじことなり。乍去これは篠蘆などにて縁語にすずろと也。ただはそぞろなるべし。事書に旅のこころをとあり。

皇太后宮大夫俊成

新古 たち歸り又もきてみむまつしまや小島のとまや波にあらすな

奥州の名所也。眼前の面白境地難忘き間、今は日をさしていそぐ旅なれば、此眺望をも心しづかにながめぬほどに、やがて立歸りみんと、京よりは遠路をやすやすといへり。一段彼在所の名所を愛したる體也。海邊は一夜にも波にてあるるものなれば、此苫屋をあらすなと波に下知したる也。

家隆朝臣

新古 明けば又こゆべき山のみねなれやそら行く月のすゑのしら雲

旅の體をうちわびてよめる也。又と云字に心をつけてみよと也。昨日も今日もいくつの山をこえてきたれども、そら行く月に雲のそびえてあるをみて、さてもさても高山かなとおもひて、こよひはかりねして、あすは又猶高山をこえむことよとなげきたる體也。すゑのしら雲制の詞也。

源俊頼朝臣

千難波江の藻にうづもるる玉がしはあらはれてだに人をこひばや

千載には戀の歌の第一に入て、はじめの戀のこころをよめるとあり。戀の本意は忍を本とするに、了簡もなき間あらはれてなりともとなり。名にしおはばあふさかやまの五味などといへるこころにもにたり。玉柏は石也。又玉松玉椿などのごとくに柏の木をもいふ事是又勿論なり。專順發句に、

庭にしく眞砂やつゆの玉がしは

草木の中に秋ぞしらるる

夕月夜竹の葉山にみえそめて　行助

これらも發句を石に治定せむが爲也。あらはれてといはむ爲の序うたなり。堪忍の心もなりがたければ、あらはれて成ともとねがひたる歌也。稱名院說に、柯如青銅根如石と云云。杜子美

攝政太政大臣



新古もらすなよ雲ゐるみねの初時雨木の葉は下に色かはるとも

我おもひの切なれば、もらすなと心に心をそへて下知したるなり。しぐれは初の戀の心なり。又漸初時雨に木葉は色かはるとも、われはもらすなよと涙にせいしたる心也。詞のくさり言語道斷也。

よみ人しらず　多本知此後撰には源ひとしの朝臣とあり

後撰東路のさ野の舟ばしかけてのみおもひわたるをしる人のなき

此歌の舟橋はかけてといはんため也。舟橋むかしは上野也。今は下野也。萬葉に上野の歌に

かみつけの佐野田の苗のむらなへにことは定めつ今はいかにせむ

とあり。歌の心は、おもひわたるをせめてしらせばやとおもへども、それさへかなはぬことよとおもひ歎きてよめるなり。稱名院說に、かけては不斷心にかけておもふ心也と云云。

源ひとしの朝臣

後撰 淺茅生の小野の篠原しのぶれどあまりてなどか人のこひしき

上は例の序歌也。忍ぶれどあまりてといへる心尤切なる戀の義也。かやうにやすやすときこえたる歌を、よくおもひ入事其人たるべし。あまりてなどかに心をつくべし。定家卿

なほざりの小野の淺茅に置く露も末葉にあまる秋の夕暮

此歌をとれる也。ある抄に、あさぢふのを野名所にあらずと云云。又或抄に、わが心に忍ぶと知りたらば、心にあまりて戀しきぞと也と云云。

皇太后宮大夫俊成

千 いかにせむ室の八島に宿もがなこひのけぶりをそらにまがへむ

此五文字は至つて切なる心也。おもひくづをれてせむかたなきゆゑいひ出でたる詞也。室の八島は富士權現勸請したる故常にけぶりたつとなり。ここを宿にしたらばおもひの烟もまがはうずる物をと也。室のやしまは下野の國也。

古 夕暮は雲のはたてに物ぞおもふ天津そらなる人をこふとて

雲の旗手とは、日のいりぬるとき山のはにひかりのすらすらとたちのぼりたるやうにみゆるが、くもの旗の手にもにたるをいふなり。又蛛の手のよしかきたるものもあれど、天津空などよめる歌なれば、雲ならでうたがふべきかたなし。重之蛛とよみたるも雲のはたてなれど、蛛にそへよまむなかるべき事にあらず。猶雲の旗手とはおもひみだるるよし也。天津そらなる人とはおよびなき人をいふにや。又或祕抄に、雲の旗手は夕陽の山のはに映じてそこに立雲也。此故に夕などといふ題にて雲の旗手とばかり詠じて心可足。夕紅葉と云題に、

立田姫雲のはたてにかけておる秋の衣はぬきもさだめず

定家卿かくのごとくよめり。是にて可意得と云云。さて此歌は四條后を戀ひて滋春のよめる也。后滋春とはいとこ也。后は前にも注するごとく行平よみ人しらず

の娘也。

ささがにの雲のはたてのさわぐかな風こそ雲のいのちなりけれ

如此もよめり。乍去顯注密勘に定家卿付雲說用之不用蛛と云云。稱名院說に、雲のはたては思ひのそらにみちたる心をもいふか云云。又師說にいはく、萬葉に國のはたてとあり。是も國にもののみちたるこころなり。又或說に、黃帝と蚩尤との戰の古事を雲の旗手といふ本說にひけり。不用之史記十八史等にみえず、誤也。猶別に注すべし。

伊勢

新古なにはがたみじかき蘆のふしのまもあはで此よを過してよとや

てよとやはあはずしてすぐせとの心中かと也。五文字に君臣あり。是は君の姿の五文字也。大やうにいひわたる也。後におく五文字多物也。眼を繪かきの後に入るるごとく也。歌の心は、おもひそめしより此かた、人にもえんを求め、詞をも盡し、心をもくだき、あるはたのめてすぐし、あるは又かけもはなれずして年月をかさぬれば、さてもいかがせんとおもひあまりたる上に、うち歎きていひいでたる歌也。ふしのまとはいささかばかりもと云心也。家集にはみじかき蘆のふしごとにと有也。

源俊頼朝臣

千うかりける人を初瀨の山颪よはげしかれとはいのらぬものをいのれどもあはぬ戀といふ題也。初瀨に戀をいのる事は住吉物語にあるなり。ぱつせは所がらやまふかくはげしきなり。詞心姿ともに心にまかせて及びがたきと定家卿褒美の歌也。いのれどもいのれども人のこころのはげしければ、かへりてはげしかれと祈りたるやうなりとよめり。猶百人一首の鈔にくはしくしるす。

新院御製

詞花瀨をはやみ岩にせかるるたき川のわれても末にあはむとぞおもふ

心は岩にせかるる河はわれぬれど、かならず末にあふもの也。我中は更に

たのむかたなき物を、わりなうもすゑにあはむとおもふは、はかなき事ぞと打歎くよしの義也。われてとはわりなうといへる心也。伊勢物語に、二日といふ夜われてあはむといふ。わりなき心也。又或抄に、われてはわかれてもとみるべき也。岩にせかるるはわりなくして也。又別てはいくすぢに成てもなり。我ながらはかなき心にて身をせめたる歌也。金葉集下くら人にて侍りける比、内をわりなく出て、女の本にまかりてよめる。藤原永實、

三日月のおぼろげならぬ戀しさにわれてぞいづる雲のうへより

伊　勢

後撰

おもひ川たえずながるる水の泡のうたかた人にあはできえめや

前書に、まかるところしらせず侍りける比、又あひしりてはべりけるをとこの、日ごろたづねわびてうせにたるとなむおもひつるといへりければとあり。宗祇注に二の心あり。一には仲平といふをとこの、詞書のごとくにいへる時よめりとあり。又一にはしばしも人にあはで消えめや、善惡はかなき身なりとも、おもひをとげんといひたる心也。うたかたと云ふに說說あり。暫時也。しばし也。萬葉の歌に又說說あり。一にはすこしといふ詞、一にはわすれずと云詞、一にはかりそめと云詞、一には水のながれにある水つぼと云心ともみえたり。又河海抄にいはく、うたてといふ詞也。水のうたかたなり。一說さだめなき人也。又すこしもと云心也。水源抄定家卿云、うたかたとは眞名に寧などつかへる詞のやうに、おもひよることはさなくてはいかでかはと云由也。それを此歌一をみて、（私云源氏物語眞木柱の歌也）うきたる人と云ふよしに、うたかた人と六字につづけてよめりと云說は、ふかくみわかでしりがほにのべやる說也。四文字の詞也。萬の十二に、

うたかたもいひつつもあるか我ながら地にはおちじ空にけなましと

注釋云うたかたと云事わすれずと云事也といへり。しかれども此歌にはかきあひてもきこえず。是は水のながれにある水つぼといふを、うたかたといふといへり。此義によらば、今のうたは雨雲などの軒の玉水のうたか

たときこえたり。さてこそいひつつもあるかともよそへ、つちにはおちじ
空にけなましともよそふべきゆゑ也と云云。同十五の卷に、
はなれそにたてるむろの木うたかたも久しき時を過ぎにけるかも
或抄云、うたかたはわすれずと云事也といへり。然れども今の歌にあひかなひても見えず。是はかりそめといへるにやあらん。はなれ磯とははなれたるいそなれば、それに生たるむろの木のかりそめなるやうにみえながら、久しき時をすぎけるとよめるなるべしと云云。同十七の卷に、
あまさかる夷にある我をうたかたもひもときさけて思ほすらめや
うたかたとはわすれずと云詞也とかきたる事も侍るに、此歌こそさもやときこえ侍るめれと云云。又同卷に、
鶯のきなく山振うたかたも君がてふれず花ちらめやも
うたかたはかりそめ也と云云。又稱名院筆の源氏の抄に、順說に云、うたかたとはうたてと云心歟。それを水のうたかたにそへたる也。一說にいはく、



さだめなき人也と云云。又八雲御抄には、泡の字の下にうたかたと云云。さてうたかたときりて、人の字すみてよむべし。或抄に、定家卿說につきて、うたかたは寧などいへる心なれば、めやととむべき事也と云云。

九

人

拾遺なき名のみたつの市とはさわげども、いさまだ人をうるよしもなし
我名は市のごとくに立さわげども、逢ふよしのなきと云心也。うるよしもなしはわがものにならぬ心也。此歌にて定家卿
敷島の道に我名は辰の市やいさまだしらぬやまとことの葉
とよめる也。又西行法師歌に、
なきなこそしかまの市に立初むれまだあひそめぬこひするものを
又伊勢物語にえうまじう成てといへるも同心也。うるは市の縁語也。
よみ人しらず
古かたいとをこなたかなたによりかけてあはずば何を玉のをにせむ

こなたかなたとは人をおもひそめて、とやいひよらむかくやいひよらむ。おもふにあはずばおもひこそきえめとなり。玉の緒は命のこと也。色色の說あれども也。此歌は仁明第六御子弘世親王染殿の后をおもひかけての歌也と云云。周仁勘に本朝紹運圖にみえず、猶可勘。又こなたかなたとはわがおもひする方をこなたといひ、つれなき人をかなたといふなり。

源俊頼朝臣

金　おもひ草葉末にむすぶしら露のたまたまきては手にもたまらず

おもひ草說說あり。萬葉第十卷の歌に、

道のべの尾花の下のおもひ草今さらなにのものかおもはむ

注におもひ草とは瞿麥をいふと云說あり。又茅をいふともいへり。茅の葉は枝などもなくて只ひとすぢひとすぢおひたるなり。何事も物をまことしく思ふには、ただひとことにのみ心をかけて餘念なきためしなり。されば大聖世尊利益衆生のために八相作佛をしめしたまうて、同居の成道をとなへ給ふときに、吉祥草を座として成正覺給ふ也。吉祥草といふは茅草也と云云。又此歌を或萬葉の鈔に、九條前關白は紫苑をいふなりと云云。又定家卿はりんだうと云云。又は萱草を申とかやと云云。但枯わたる比の薄のもとに龍膽のさきたるを、紫のゆかりなつかしき色をおもひつる心也といへり。定家卿の義尤可爲正義と云云。八雲御抄にはおもひ草と云ふは露草也と通具說也と云云。言塵抄にはなでしこと云云。さて歌の心は、ずゑ葉の露はたまらず散るものなれば、たまたまきては手にもたまらずとは、きてもとどまらず、やがて立歸る心也。又師說いはく、思ひ草は何にてもあれ、はかなき草と心得よと也。

皇太后宮大夫俊成

千　おもひきやしぢのはしがきかきつけて百夜も同じ丸ねせむとは

此歌は臨期變約戀と云題也。しぢのはしがきといふ義につきて說說あり。古今第十五の卷戀部の五に、

曉の鳴の羽がき百羽がき君がこぬよはわれぞかずかく

曉のしぢのはしがき百羽がき君がこぬよはわれぞかずかく

此二首の兩義ともに用也。或云しぢのはしがき、しぎのはねがき、百羽がき、百夜がき、五音相通故と云云。しかれどもむかしより兩說共に用來也。しぢのはしがきと云ふに本あり。淳和の御時藤原鳥養といふ人あり。同氏に永の大臣といふ人のむすめをよばひてあはむといひければ、答云心ざしあらば夜ごとにきて、我のる車のしぢのはしに數をかけ、百にまんせん時あはんといふ。百にまんずる夜親死(しに)てえゆかず。それよりあはぬ事にいふ也。此淳和の御時と鳥養など慥に勘不得、不審なり。相傳の祕抄には、むかしあやにくなる女をよばふをとこありけり。心ざしあるよしをいひければ、女こころみんとて車の楊に百夜ねて、その數かきたらばいはんことをきかんといひしほどに、九十九夜までねて今一夜のこりたるに、その男の親死て來らず。女も哀とおもひて百夜にみてる數を一つかきて、此歌をよめり

となり。歌論義といふ物に、書きあやまりて兩說になれるを、其儘にあらためずして二ながら用來る也。又千五百番に慈鎭

とにかくにうきかずかくは我なれや鳴のはねがきしぢのはしがき

と一首によめり。又歌林良材には、百夜しぢの上にふしたらば逢べきと契りたるゆゑに、よごとにきて楊のうへに丸寢をして、九十九よまでは數をとりて、楊のはしにかきたることをいふなりと云云。又顯注密勘に、二條大臣の別當と申歌よみの、しぢの丸ねにいのちたえなばとよみたりし後は、しぢのまろねといふ事よみあへりと云云。又或說に、光仁の御時紫藤の中納言といふ人、內裡につかふまつる女をおもひてかよひけるが、いかがおもひけむ、あはずなりにければ、行きて恨みけるに、はこのかけごに入れたる鳴の羽をとりいでて使にとらせけり。これをもてあかつきごとにきて、我家の庭に數をかけ、百日まんせん時にあはむといふ。かず百日にまんずる日、かの鳴の羽をうしなひぬ。百日にまんじける夜、男きてあはむといふ

ときに、さらばその羽をたべとこふに、うせぬといひければ、我をば大切におもひ給はねばこそ其羽をば失ひましませ。さだめてことものにてぞかき給ひぬらんとてつひにあはず。それよりいふ也と云云。當流不用之也。

壬生忠岑

古有明のつれなくみえし別よりあかつきばかりうきものはなし

此歌不逢歸戀の歌也。有明はひさしく殘るものなればつれなくとそへたる也。人のもとへ行きて終夜心をつくしていかであはむとおもふに、人は難面てはてぬればいかがはせん、あひみて立わかるるころの有明さへ哀ふかかるべきに、ましてあはずしてわかるるかへるさなれば、おもひわびて、あかつきばかり世にうきものはあらじとおもふよし也。此歌に說說あり。猶百人一首の抄に注す。

よみ人しらず

古名取川せゝの埋木あらはればいかにせむとかあひみそめけむ

戀は歌連歌ともに何となく難成と也。此歌はなにとなく殊勝也。名取川は陸奥の國名取の郡にあり。顯昭はいはく、埋木は水にも土にも年久しくうづもれたる木也。定家卿云、人のゆるさぬ事、おもひの外にこそなれそめけめ。おもひつづくれば、あらはれなばいかにせむとおもひて、あひみそめけるぞと、世のつつましさせんかたなき事をなげきけるにこそ侍らめ。私云顯昭はあらはれてといへる也 只同心なれど、あらはればといひてこそ歌のすがたは艶にをかしくはべれ。あらはれてといひてはことやうなる歌也。

杉板もてふける板間のあはざらばいかにせむとかわがねそめけむ

只同心也。かれはふるき歌にて直にこれ艶に侍るを、返返もあらはればとぞ、まことの貫之はおもはれけむと顯注密勘にある也。此歌は染殿の后に逢ひてける紀眞成歌也。本名は名虎也。此歌にて定家卿

名取川春の日かずはあらはれてはなにぞしづむせゝの埋木

とよめり。

素性法師

古今こむといひしばかりに長月の有明の月をまちいでつるかな

今こん今こんといふほどに、まことかと思ひて、月のはじめから月の末まで待つほどに、おのづから有明のころになるまで待故、有明の月をまちとりたるぞと也。冷泉家にはただ一夜の有明に用る也。二條家には春夏を待ちくらし、又秋の長月の有明までまちたる也。月末までの事也。顯昭は一夜と心得、定家卿は今こんといひし人を日來待ほどに、秋もくれ月さへ有明になりぬとぞよみ侍りけむ。こよひばかりは猶心づくしならずやといへり。或祕抄に、此歌は清水寺別當法橋覺俊が娘を戀ひてよめりといへり。

元良親王

後撰あふ事は遠山ずりのかり衣きてはかひなきねをのみぞなく

是序歌の心也。一説に遠山どりのといへり。あふことはとほしとつづけて、又衣はきてとつづけむためなり。やまどりとはあふことかたきものなる故也。仍覺説に大嘗會の時は梧竹を文に摺也。野の行幸の時は遠山などをする也といへり。

人丸

拾遺葦引の山鳥の尾のしだり尾のながながしよをひとりかもねむ

あしびきといふこと前に注す。宗祇注に此歌ただあし引のとうちいでたるより、山どりのをのしだり尾のと云ひて、ながながしよをといへるさま、いかほどもかぎりなき夜の長さなり。詞つづき妙にして風情尤長高し。かかる歌をば數返吟ずべしとぞ。又ある抄に、さてかやうのながき夜、夫婦ひとつにもねでひとりねんかと打歎きたる心也と云云。

元良親王

後撰侘びぬれば今はた同じなにはなる身をつくしてもあはむとぞおもふ

是は宇多御門の御時、京極の御息所へ忍びてかよひけるを、あらはれて後つかはしたる歌也。幽玄の體の歌なり。あはずともたちにし名は同じ事な

れば、身をつくしてもあはんと也。澪標は難波の縁語也。同じ難波とつづけたるは、同じ名とうけたる也。拾遺に、

侘びぬれば常はゆゆしき七夕もうらやまれぬる物にぞ有りける

五文字に侘びぬればとあるは、あはれふかき心也。猶百人一首の注に委く注す。

大僧正慈圓

新古 我戀は庭のむらはぎうらがれて人をも身をも秋のゆふぐれ

此歌は萬葉に、

わがせこを我待ちをればわがやどの草さへおもひうらがれにけり

此歌をとれり。我戀はと五文字におく事、するむづかしき間用捨あるべき事と也。わが戀は松をしぐれのなど同前也。萩のさく時分はうちたのむに、はなもはやうつろひてうらがれになれば、今ははや問事もあらじと、人の心ほどうらめしき物はなしと、人をも身をもうらみたる體也。庭といふ字に心をつけてみるべし。野べのなどにては曲も有まじ。朝夕ながめなれたる庭のはぎにてかくいへり。右の萬葉の歌より萩は戀に縁あるなり。此外も萩に戀はよめり。

太上天皇後鳥羽院也

新古 袖の露もあらぬ色にぞ消えかへるうつればかはる歎せしまに

被忘戀の御歌也。小町が

花の色はうつりにけりないたづらに我身よにふるながめせしまに

といふをとれり。人の心のかはるにしたがひて、むかしおもひ初し時の涙は、紅にもなかりしも、あらぬ色にうつりかはり、又我おもひもあらぬおもひになるなり。きえかへるは、露の結ぶかとおもへば消え、又消ゆるかとおもへばむすぶ心なり。うつりかはりて紅涙となる也。

よみ人しらず

古 おもひいづる常盤の山の岩つつじいはねばこそあれ戀しき物を

おもひいづるときとつづくる歌おほし。岩つつじはいはねばといはむ爲の序也。此歌は業平元服の後、眞雅僧正の讀みてつかはしけると云云。又云つつじには用なしといへり。又或說に、此歌はおもひいづるときは野山の と書けり。當流不用之也。常盤山の名所にてなきよし、甚以謬說也。又或抄に、此歌は高光の少將、九條の右大臣師輔の子にてときめきたりしが、淳和の御子に惟仁親王と申につかふまつりしが、みこにおくれて遁世して多武の峯に住みし時、七才になる娘のかたより戀しきよし申たりし返事によみてつかはすなり。しかれば戀の歌に入るべからずといへども、歌の面に付きて入るといへり。一兩本如此。稱名院は眞雅といへり。猶可尋之。

清原元輔

後拾

ちぎりきなかたみに袖をしぼりつつすゑの松山波こさじとは

さてもかやうにあだにかはるものならば、などちぎりつるぞとはぢしめたる心也。かたみは互也。こころのかはるなり。うらみずしてちぎりしをうらむるなり。末の松山を波のこゆるといふ事說說あり。あだなるたとへなり。猶百人一首の抄にくはしくしるす也。

圓位法師西行本名也

なげけとて月やは物をおもはするかこちがほなるわがなみだかな

月前戀と云題也。終夜月に向ひてうちながむるに、わが心をいたましむるやうにある也。時は秋なり。則陰氣故こころもすむままに、無心の月をかこつも我おもひあるゆゑと自問自答したる也と云云。西行の歌はすこし平懷の體あるなり。これはつくろふ所なき上手の風骨也。

白樂天贈內詩に莫對月明思往事損君顏色減君年。

樂天が女方へ送りたる詩也。又

大方は月をもめでし是ぞ此つもれば人の老となるもの

世にふるは物おもふとしもなけれども月にいく度ながめしつらむ

此二首も同心也。稱名院說にも此兩首引く也といへり。

圖書寮本御奥書

這鈔雖愚鈍集善說述之匹耐々々矣

慶長十二暦閏仲呂廿又三口

從神武百餘代孫周仁



# 後水尾天皇 伊勢物語御抄

一詠歌大概に云、殊可見習者古今伊勢物語後撰拾遺と云ひたり。於歌道尤可翫書也。

一東常縁は、さしたる人にてもなき者には以古注よむよき、門弟には本式によむ也。逍遙院、稱名院、三光院等も古註をまじへてよむ事あり。

一定家は、物語の作者をば落著せずしておく也。されども伊勢が書と云事心よせなると見えたり。

一此物語の歌作者、誰ともなきをば其名をあらはして所用なき事也。讀人不知の類にて可然也。漢書惠帝記に、四年庚戌冬十月壬寅立皇后張氏。注顏師古曰。張敖之女也。史記及漢書無名字。皇甫謐作帝王世紀。皆爲惠帝張后及孝文薄后以下別制名焉。至薄父之徒亦立名字。何從而得之乎。雖欲爾博聞不知陷

於穿鑿とあり。此注の心道に能叶へり。仍引之、只何れも讀人不知之例にて有べき也。此物語の表計にて心得侍るを口傳とするにや。

物語　伊勢上下、大和上下、源氏五十四帖、此外物語非强最要。八雲御抄　天子書

一遊遙院講談を稱名院聞書にいはく、講釋事十度によむ也。急時は八度にもよむべし。

一享祿元十一二於禁中遊遙院講、從端至十五段、三日至卅八段、八日至六十四段、九日至八十段、十一日至九十六段、十三日終功奥一段不續云云、已上六度也。

一或人鈔云、初度自題號至三段、二度自四段至十段、三度自十一段至廿段、四度自廿一段至卅二段、五度自卅三段至四十五段、六度自四十六段至六十一段、七度自六十二段至六十八段、八度自六十九段至七十八段、九度自七十九段至八十六段、十度自八十七段至九十六段、十一度自九十七段至百九段、十二度自百十段終功。

一稱抄に、東常緣はさしたる人にてなき者に以古注ヨムヨキ、門弟には本式に讀むと云云。

一同前、宗祇もはじめつかたは古注をまじへてよみたり。不謂事也。一條禪閤も被破之、年紀もちがひたる事多し。

## 世間流布之本奥書

抑伊勢物語根源古人之說說不同、或曰在原中將自記云云、因茲有謙退比興之詞等。抑發語辭韻會、而强與注語辭。假名抄云―は上を押へて下を起す詞、中庸。

又云伊勢筆作也。或云生年十三幼書之。似彼家集文體、是故號伊勢物語、以此兩說案之。更難決之。心中祕密、身上與言、他人推而難注之、以之可謂其自書歟。

但疑萬葉古風中、多載撰集歌、仁和聖日之間、粗記臨幸之儀。

御押紙云但疑萬葉古風云云、烏丸故大納言講談云、但はただと云義也、此中にて深疑心也、但の字をさあれどもといふやうなる心に用は世俗のこと也、萬葉の外に撰集の歌を載たるやうに聞ゆ、さには非ず、萬葉の古風しかも撰集の歌を載る也、撰集と云は萬葉集の事也云云、私云但字は唯但の二字不借餘緣なればさもあるべき也、萬葉の古風の義は如何、闕疑抄の分にても義は不聞歟、私云是は業平自書と云がたき事どもをいひたてたる一段歟、然ば業平歌の萬葉の古風の中にても、古今後撰等の撰集に入たる歌を多く此物語に書のせたり、業平は元慶四年正月廿八日卒云云、古今集は延喜五年選れたり、撰集は何れも業平沒後のことなり、撰集に入たる歌は別して清撰なるべければ、後人撰集に入たる歌を書載たる乎と云義歟。

此等事又不審、伊勢家集其端文體偏以同之、是又見先達舊記庶幾其體歟、兩兩不知之、加之此物語名字非彼筆者何稱伊勢乎。

或說云爲狩使下向伊勢、仍有此名、其說又難信、始則載南京春日之詞、次又注西對夜月之思、富士山之雪、武藏野之煙、凡非伊勢國事、多以爲此物語之肝心、仍兩說共有不審、古事只仰而可信。

又或說、後人以狩使事改爲此草子端、爲叶伊勢物語之道理也、件本狼藉奇怪者也、伊行所爲也、不用之。

先年所書之本爲人被借失、仍爲備證本重所校合也。

戸部尙書判

むかしおとこ　むかしと句を切て、おとこと又句を切て讀也。むかしと置く、佛經に爾時とおき、素問と云醫書などにも、昔黄帝生而神靈弱而能言とあり。

昔、一曰、古也。往也。往者前代也。曩昔嚮日也。疇昔昨日也。又夜也。一昔一夕也。通昔通宵也。

うひかうふりして　うひかうふり　漢書昭帝紀、四年春正月丁亥帝加元服。注如淳。謂初冠加上服也。師古曰。如氏以爲衣服之服此說非也。元首也。冠者首之所著。故曰元服。其下汲黯傳序云。上正元服。是知謂冠爲元服。

ならの京かすがの里に　奈良京、平城の都也。

しるよししして　知行などの事と云も巨細也。ただ阿保親王の舊宅などとみるが幽玄也。

かりにいにけり　假初也。かりそめの聲によむ也。日義、狩の義にてもある也。狩といふよりは假初の義優なるかと也。

その里にいとなまめいたる女　なまめく、日義、いかにも優にしづしづと
したる體なり。眞名の伊勢物語には媚の一字を讀む。愚見には生の字をも
なまめくとよめりとあり。不用也。
はらから　清輔本、女はらとあるも面白し。
この男かいまみてけりおもほえずふるさとにいとはしたなくてありけれ
ば心ちまどひにけり　日義、存じもかけぬ也。歌などにも下にいふやうな
るは少し心かはる歟。
かひまみ　視其私屏日本記によりて　視私屏の三字にも書也。闚の字をも訓也。闚
缺規切說文閃也以門規聲謂傾頭門中視也語闚見室家好韻會
はしたなく　畢竟不相應の義也。荒たる所に風流なる女のあるは不相應
也。又或抄に半の字をはしたと訓、はしたになき也。ほめたる義なり。三義、た
よりなき心なり。爰に能叶へり。
心地まどひにけり　帚木にさびしくあれたらむ葎の門に、思のほかにら
うたけならむ人の、とぢられたらむこそ、かぎりなくめづらしくおぼえめ。
いかではたかかりけむと思ふよりは、たがへることなむあやしく心とまる
わざなりとあり。此心に似たり。
をとこのきたりける　御押紙愚案御抄云、宗祇說に狩衣に歌を書たる事とばか
り心得侍る義あまりにや、只かり衣のすそをきりて歌をそへてやる也。總
じて梅櫻に付て送るには其梅櫻の事を讀るが如し。
しのぶずりのかりぎぬ　闕疑抄もとは狩裝束に云云、むかしは風流の事にする
也。
新千載七、朱雀院御時藤原親盛がからものの使にまかりけるに、こがねの
火打にぢんのほくそを忍ぶずりの袋に入てつかはすとてよみ侍りける。
權中納言敦忠、うちつけに思ひいづやと故里の忍ぶ草してすれるなりけ
り。
かすが野の　紫といふものは武藏野先本なり。この歌は序歌に似て非序

歌。

御押紙 愚案御抄云、摺衣とは紫の根すりなどとて、紫にて衣をする物なればいへり。されば歌に、こひしくは下にを思へ紫の根すりの衣色にいづなゆめ。人しれでねたさもねたし紫の根すりのきぬのうはぎなりとも。是は寢てすりたる衣をよめる也。右に云處の歌は、紫の根にてすりたる衣をいへり。すり衣、日義、この字清濁兩樣共用。

おいつきて　御押紙 追尋と云字日本記に見えたり。此字心能叶か。日義 私云日本記雖未勘可爲追尋也。哀公十二、魯公會吳謂尋盟。子貢曰盟弗可改也。若可尋可寒云云。

となむ　ここにて引はなちて春日野の歌をついづるなりおいつきて云より女の返歌の事を云也。

みちのくの　此抄返歌は融のおとどの歌也。昔はいかに讀すてたる歌なれども、面白き歌をば兒女子も口に誦しけり。

元微之が白氏文集の序にも、王公妾婦牛童馬走之口無不道、白居易が詩の事をかけり。

みちのくの忍ぶもぢずり　御押紙 闕疑鈔、古今にては誰故に亂れそめし云云とあり。古今には四句亂れむと思ふとあり。然ば抄の義如何。

といふ歌のこころばへなり。むかし人はかくいちはやきみやひをなむしける。

みやび　風姿、日四 容貌、旦閑、日二 溫雅、十四 少而閑雅、寡欲、三十 斐然文藻

十七

御押紙 といふ歌の心ばへなり　宵聞云、女の返しの注也。闕疑抄云、返歌の心を用かへたるをいふ云云。此等はといふ歌の言より物語の作者の詞としたるにや。近き比の衆の講讀何も右の趣也。後輩の僻案雖有其憚、愚意の趣といふ歌の心ばへなりと云までは、みちのくの歌に書そへて送りたる女の詞とみるべきか。只今の女の歌にてはなきと知しめんが爲に如此の歌あり。

女の心、此歌の心ばへにてこそあれと云義か。然ば此物語の奥に、櫻花今日こそかくも云云と云歌の次の詞にも、と云こころばへあるべしとあり。此櫻花の歌も古歌にや。愚見抄に、物語の中に萬葉集などの古き歌をそのまゝのせたる事あり。或上句にても下句にても取かへたる事もあり。是は今云事により來れる事あれば、古歌をそのまゝ云へる事其例なきにあらず。左傳などに諸侯の大夫を宴する時に、詩を賦と云事今あたらしく作りたるやうに云たれど、昔の三百篇の詩をうたひて其志をのぶる事あり。今の物語に古き歌を詠ずる事、是に准ずべきにやと云云。然ば定家勘物の河原左大臣歌也云云、於在中將非義先達如何とあるも、古歌を返歌に用ふる事は連綿の事也。當時の河原左大臣の歌を、古歌などの樣にと云歌の心ばへなど云事如何と云心にてもあるべきか。さあらば此勘物の心も無不審か。此勘物を闕疑抄に注したる趣難得心。其外丁簡之說に雖有之、何も義不分明乎。河原大臣歌也。左大臣源融寛平七年八月二十五日薨。於在中將非幾先達如何。（此勘物は前のとなんと云より已下の別段にみる說あり。それは知らしめん爲の勘物也。）愚案御抄云、周仁愚案に、此事此物語業平自記と云時は一部の歌在中將なれば、融公の歌を本歌にとれるにあらざるべし。似相たる時の歌を、女の返歌にかける事、作物語の故也。源氏のうつ蟬の卷に、空蟬の羽に置く露の木がくれて忍び忍びにぬるる袖かな。此歌伊勢が家集にある也。是も返歌に心よく叶故古歌を書加る類也。又伊勢が筆作に見る時は此勘物に及ざる也。

むかしをとこありけりならの京はなれ云云ひとのいへまだ

愚見抄、桓武天皇延曆三年十一月に、奈良の都をさりて山城のおとくにの郡にみやこをうつす。ながおかの京といへり。同十三年の十月に又かどのの郡にうつす。是を平安の京となづく。今年より在中將の誕生せし天長二年までは三十餘年になる、たとへ中將はたちばかりの時なりとも、僅に五十餘年計の事成べし。都といふ計にて、人の家居など未ださだまらざらん事うたがふべきにあらずとあり。

年譜のこと無相違、五十餘年なれば人の家未定とあるは非なり。五十餘年には家居もさだまるべけれども、作物語なれば詞のあやに如此書なり。

その人かたちよりは心なむまさりたりける　人は心が肝要也。源氏にも花ちる里空蟬など心のよき人とほめたり。

ひとりのみもあらざりけらしそれをかのまめ男うちものがたらひてかへりきていかがおもひけむ　三義、三の思ひをつけてみるべき也。かたち心すぐれ、又主ある人故一段とふかく心のしむなり。

うちものがたらひ　日說、逍遙院はか文字濁云云、其より以後は清云云。

まめをとこ　三義、業平は好色人なり。うらを云也。上にはまめ男とほめて下にそしる也。源氏に夕霧をまめ男と云同心也。

時はやよひのついたちあめそほふるにやりける　そほふる、只春雨の風情也。愚見にそをふるはそと降雨を云へり。又そほぬれてなど云ふがごとしと云云、不用。

おきもせすねもせで　おきもせず、三義、我思ひと空の體と似たると也。暮もせず、明もせずなり。

日義、春の物とて、野山の景色などもはるはながめがちなる物なれば也。物とては、春のならひとてなど云心也。夜不寐晝不起と云義なり。是も不捨一說也。

御抑說愚案御抄云、顯昭が云、春の物とてながめくらしつとあるは、霖雨をばながめとよむ也。ながめをながむるにそへてよめり。春雨はひさしく降物なればながが雨を春雨とよめり。定家卿云、ながめながあめ同此說と云云。或祕抄に云、そほふるは閑にふる心なり。歌の心は、おくるにもぬるにもあらずして夜をあかして、其儘ながめくらせるさま也。春の物とてと云は、春の霞わたりてばうばうとしたるに、終日ながめくらせるなるべし。此物語にては、面は長雨、下は詠也。古今にては上は詠、下には雨の心もある也。文選十一遊天台山賦序、馳神運思畫詠宵興。下略

むかし男ありけりけさうしける（御押紙ひじきも）　愚案御抄云、愚にひじきは海藻也といへり。鹿尾菜と書、又六尾菜とも書といへり。周勘に、和名鹿尾菜とあり。六味菜といふと云云。同前の義也。

思ひあらば　思ひなき身にてあらばと云義なり。袖を片敷は獨寐也、逢時には袖をかさぬるなり。逢ことをこそ願べき事なれども、その貪著もなく此苦しき思だになくば、葎の宿に袖を片敷ても足ぬと也。

（御押紙）思ひあらば　思ひあらば玉樓金殿もかひなし、思ひなくばむぐらの宿にもねぬべきと云なり。

たへてやは云云の歌にて、葎の宿に思のなき事能聞えたり。世間の思ひはありとも、何ともせんやうなし。此葎の宿の秋の夕暮はたへがたきと也。日義

二條のきさきのまだみかどにもつかうまつりたまはでただ人にておはしましける時の事なり　かやうの事はかくろへ事にてあるべきを、如斯書あらはせり。學者可探湯事也。孔子曰見善如不及見不善如探湯。注孔子曰探湯喩去惡疾。論語季氏

むかしひんがしの五條云云　にしの對にすむ人ありけり　對は寢殿に相對たる義也。一の對は西、二の對は東也。三義

西のたい　寢殿造には西東の對あり。其内西は賞翫也。

それをほいにはあらで心ざしふかかりける人ゆきとぶらひけるをむ月の十日ばかりの程にほかにかくれにけり　外にかくれにけり、入内ちかへなるほどに女のつつしみある也。愚見、女御に立給ひて内に參り給ふを、外にかくれにけりと云べしと云云。此義もおもしろし。

又の年のむ月に梅の花さかりにこぞをこひていきて立ちて見ゐて見みれどこぞにはるべくもあらずうちなきてあばらなるいたじきに月のかたぶくまでふせりてこぞを思ひ出でてよめる

梅の花さかりに、さの字濁也。あながち西の對の梅にあらずとも、世間のさ

かりなるべし。長恨歌に、春風桃李花開日、秋露梧桐葉落時といへる類也。

たちてみゐてみ、みはやすめ字也。但見の字にみたるもよきか。猶以思の切なるやうにきこゆる也。

あばらなるいたじきに、主人なければ荒たるやうに覺るにや。古今、打つけにさびしくもあるか紅葉ばのぬしなき宿は色なかりけり。君子居之何陋有。于罕

月やあらぬ　愚見の義面白し。肖聞もきこえたり。但し少かはる義あり。思人のなきが故、月も春も我身もあらぬ世のもののやうに覺ゆる也。されども其思ふものは何ぞと云に我心也。さらば我身はもとの身にてありけるよと云義也。されば月も春も皆昔のもの也。ひとつはのはの字あたらずにゆるべて見るべし。はの字をつよくみれば、我身ひとつはもとのものなると別別になるやうに聞ゆるなり。

御押紙 月やあらぬ云云、月も昔の月にてはなく、春も昔の春にてはなく、我身もあらぬ世のもののやうに覺るをとがめて、月はあらぬ月乎、春はあらぬ春か、我身もあらぬ物乎と思へば、かく思ふものは我身はもとの身にてありけるよと云て、さあれば月も春も我身も皆もとのままにて、ひとつに見し折のやうにはなくかはり果てたるは、人ひとりのなき故也と、悲む心言外に顯れたる歌也。日義、春といふに梅の花ざかりなどの心こもるか。我身ひとつはのはの字を捨ると云說ありはの字を捨て我身ひとつもとの身にしてと云ても、義理かはる事なし。然ば難得其意。若有明のつれなくの歌を、曉ばかりのばかりの字をすててみるといふ類か。義理には相違なくて、詠吟の上に有味事歟。

御押紙 崔護出第。清明獨遊都城南。得村居花木叢萃。叩門久之。有女子自門隙問之。對曰。尋春獨行酒濁求飲。女子啓關以盂水至。獨倚小机樹佇立。屬意殊厚。崔辭起。送至門。如不勝情。而入後絕不復至。及歲清明經往尋之。門庭如故而戶扃矣。因題其左扉云。去年今日此門中。人面桃花相映紅。人面不知何處去。桃花依舊咲

春風。後數日復往聞哭聲。問之老父曰。君非崔護邪。吾女自去年恍惚如有所失。及見左扉字。遂病而死。崔請入哭之。尙儼然在狀。崔擧其首。枕其股曰。護在斯。護在斯。須臾開目。半日復活。老父大喜以女歸之。書林廣記

むかしをとこありけりひむがしの五條　みそかなる所、此段も前と同じ所也。

わらはべのふみあけたるついひぢのくづれよりかよひけり

ただ忍びたる道なり。詞のあやにかく書なり。愚見に草かりわらはなどの道にしたる心也。かやうに荒たる所なれば、上にあばらなる板敷と云りと云云、穿鑿過たり。不可用。

ついひぢ　築墻和名都以加岐一曰豆以比知イ　塀ツイヒヂ

そのかよひぢに夜ごとに人をすへてまもらせければいけどもえあはで人知れぬ　忍びたる所なれば、人はしるまじきと思ひたればと云義也。肖聞に、五文字は常の人しれぬ身など云が如しとあり。されども常の人知れぬと云五文字には、かずならぬと云にかよふ五文字あり。是はさにはあらず。三義、人知れぬ身など云類なり。よひの間なりともうちもねよと歎入たる歌なり。

ねななむ　予問、ねよかしと云義の由、古鈔一同載之。只ねよと云やうに聞ゆ。ねよかしの義如何。中院中納言答云、ねよかしの義は誠難心得事也。雖然先古鈔之趣讀云云。日說、ついひぢの間より通ふ程に、人しれぬと心得るはあしき也。人しれぬ我とつづけて卑下の心なり。稱名義、此關は不破相坂などのやうなる公界の關にてはあらざる程に、關守に打もねよかしと也。玄旨の義、一夜はねよかしとなり。

心やみけり　心やましきなど云はくやしきやうなる心也。內省不疾のやうなる心也。

あるじゆるしてけり　關守をくつろげられたり。

むかしをとこありけり女のえうまじかりけるをとしをへてかよひわたり

けるをからうじてぬすみいでていとくらきにきけり
よばひ、玉鬘の卷に、けさう人は夜にかくれたるをこそよばひとはいひけ
れ。
からうじて、愚案御抄、或抄にからうじては辛勞する也と云り。私云源氏物
語などにはやうやうとして云心也。此心なほ可然か。道、面白くして女を盗
出て行と云云。
あくた川と云かはを　日義、あくた河、古注などは色色の義あれども、あく
た河と云川こそあるらめ也。
夜もふけにければ　此ければと云にて、業平の返答なかりし事きこえた
り。
雨もいたうふりければ　前に草の上におきたりける露とあり。雨は後、露
は先なり。露は晴天に置くものなり。
蔡邕月令云。陰之液也。白虎通云。露者霜之始也。小補韻會上下略　夜氣著物爲露洪武正韻



御押紙
露　說文露潤澤也。五經通義云。和氣津液爲露。　詩。英英白露。毛傳云。露亦有
雲。疏正義云。以今觀之。有雲則無露。無雲乃有露。言露亦有雲者、露雲氣微
不映日月。不得如雨之雲耳。非無雲也。若露濃霧合則清且爲昏。亦是露之
雲也。蔡邕　以下注抄
あばらなるくらに　三義、藏の字を用也。あたりにさやうの藏などもこそ
あらめ也。愚見に、業平は中將の官なれば弓やなぐひおふと云、相違なし。其
上雷鳴陣には中將弓箭を帶して內裏に伺公す。かみさへいといみじうな
るとあれば、弓箭おへるは實事なりとあり。興ある事なり。雷鳴陣、雷電日若
其聲盛則藏人奉仰可陣立之由。大鳴及三度者不得宣旨但秋節之後必待宣旨仰　卽垂御簾先大將參上。大臣
の大將此日帶弓箭但卷纓不差纓　次中少將參上。
あばらなるくらに　くらは座の字などいへども、只人遠き家也。又自然其
あたりに倉などもあるか。愚案御抄に私云草亭。遊仙窟
はや夜もあけなむと思つつゐたりけるに云云　おにはやひとくちにくひ

てけり　肖、ここに人あり、聞つけたる人の一言によりて、女をとり返したる事を一口といへり。

余説不用之とあり。御説をも不用。

ゐてこし女もなし　あしずり　土左國の蹉跎寺の觀音をあしずりの觀音と云り。慥なる字は不知。叫袖振反側足受利四管頓情消失ぬ。上下略萬浦島あ

しずり、蹉跎文選に、さたとしてふしまろぶと有。

玄ら玉かなにそと人のとひしときつゆとこたへてきえなましものを

日義、露とこたへて、露の如くきえし物をと云也。白玉か、疑のか也。一つにて

もおさへ字あれば讀也。この白玉かの歌、新古今には哀傷の中に入たる、實

に鬼もくはざれども、哀傷に見るは、まことに鬼のくひてなきものにして

入たる也。

たらうくにつねの大納言日講　まだ下らうにて　必殿上人にてなくとも

淺官の時なり。三義、殿上人と云只淺官の時也。

むかしをとこありけり云云　伊勢をはりのあはひのうみづらを行くに

肖聞、業平流罪の時の事なり。

むかしをとこありけり京やすみうかりけむ云云　住所もとむとて　此

詞など流罪とは不見。流罪なれば配所定まる也。但逐放と云は所定まらず。

いかさま公方事ならば如此はあるまじき也。江次第にも業平東國下向の

事みえたり。流罪とは不見。

しなのなる　此煙の立やうは、山も思ひが有るかと、我思ひの有るから、此

煙をも見とがめたるとなり。

拾襍神

千早ぶる神も思のあればこそ年へて富士の山はもゆらめ人丸

むかしをとこ云云　道しれる人もなくて　公方事なれば道道も祇承の

官ありて道の事を云つくるなり。此詞など私事とみえたり。

水行く河のくもでなれば　愚見の義よし。水ゆく河のくもでなれば、愚に、御抑紙

參河の八はしはふけのやうなる所に、絲くるわくのやうなる物をして、其上に板を敷きてあなたかなたへわたせるなり。今の世にはわくのやうなる物三ばかりあり。むかしは八ありけんかし。蛛の手は八ある物なれば、くもでとはいへるにや。

かれいひ　和名抄十六云、糒（平祕反與備同和名保之以比）乾飯也。餉（式亮反訓加禮比於久留俗云加禮比）以食遣人也。密食懷中之糒（ものひにくらふかふところのうちのかれいひ）日本云云

から衣　心は、大方旅のならひ、折にふれ事にふれて悲しきに、結句思ふ人を都におきてはるばる來ぬる思の切なる心を、あらはにはいはず、心にこめたるは感ふかくや。旅の空の哀も、都の妻を思ふ心も、末の句哀ふかくこもれり。大方馴れにしと云ふよりは、戀の心へやりて可見とぞ。

（御押紙後撰一）伊勢の海に鹽やく海士の藤衣なるとはすれどあはぬ君哉　躬恒

玉雜一　旅ごろもきなれの山は名のみして猶うらがなし秋の夕暮　西園寺入道前太政大臣

續千詩譜　賤のめがきなれ衣の秋あはせはやくもいそぐつちの音哉　正三位知家

後拾雜一　古へのきならし衣今更にそのものごしのとけずしもあらじ　中納言定賴

（御押紙）紅紫不以爲褻服。鄉黨　不可褻翫。愛蓮說

つたかへではしげり　題小猿叫澤　大猿叫罷小猿啼。箐裡行人白晝迷。惡藤牽頭石齧足。嫗牽兒隨淚錄續。我亦下行莫啼哭。山谷

すずろ　坐の字也。不意の心也。牢の字を訓也。（御押紙）長歌行、文選　廿八卷　陸士衡、客華夙夜零。體澤坐自捐。濟曰夙早零落也。體澤身之光潤捐棄也。善曰無故自捐曰坐也。崔護（太平廣記二百七十四事文類聚七十一女部等見之）又書林廣記是は策彥畧韻歟

するがなる　京へ送る歌にはあらず、修行者にあいさつの歌也。但新古今の詞書に、するがの國うつの山にあへる人につけて京につかはしけるとあり。

樂天詩に、天地如衾枕。旅行の體也。夢もなき體也。

かのこまだら　愚に、かのこは夏毛の星まだらなる物也。

都鳥　愚見、都鳥は鷗也。鷗の類也。鷗に類多もの也。後拾遺九羈旅、和泉の國

へ下りけるに、都どりのほのかに鳴きければよめる。　和泉式部ことと

ばありのまにまに都鳥みやこの事を我にきかせよ

舟こぞりて　大原歸途送竹香上人北遷　阮南江

窮海謫居千里程。途中携手語輕情。路人亦泣秋風暮。君向北船吾上京。

あてなる人　勝字也。すぐれたる人也。

心つけたりける　つの字濁る。なほ人、ひの字濁る。抄に、源平藤橘四姓のう

ちにも藤氏は賞翫也。むこがね、かねは實の字也。

御芳野の　よると鳴くなるは寄の字也。雁はよるよると鳴くと云ふを、後

撰には、行かへりここもかしこも旅なれやくる秋ごとにかりかりと鳴く。

秋ごとにくればかへれとたのまぬを聲にたてつつ雁とのみなくと有り。

愚案御抄云、愚、雁がねはよるよると鳴くやうに聞ゆる故に、君が方による

と讀めり。藤原氏の母、此男をむこにせんとて讀みてやれる歌也。道、君が方

へよると鳴くぞとは、そなたへ心の引と云心也。

むかし男ありけり人のむすめを云云　女をば草むらの中におきて　女

を捨てにぐるやうに見ては如何なり。女をひきゐては猶猶忍びがたき程

に、女を深く草村の中にかくしおきて男もかくるる也。女のむさし野の歌

を讀むを聞きて、女をば取りてもとに歸る也。

みちくるひと　滿の義よし。道は次の義也。

むさしのは　草をやく事は下萠の爲也。草の萠出る初をつまと云、端の義

也。古今は春日野と五文字をかへて野遊の歌とす。野遊には武藏野は遙過

たり。春日野猶面白し。　愚案御抄云、男を妻と云ひたる證歌、萬葉に、遠津

人松浦さよ姫妻こひにひれふりしよりおへる山の名。

むさしあぶみ　此人は頼み難き人なれ共、流石に頼まるるよと頼む故に。

問はざれば尤つらし、問も始終頼まるべき人にあらざればうきと云心也。

むかし男みちの國に　愚案御抄云、せちに思へる、或抄に折角に思ふ事な

り。又親切に思ふ也。

なかなかにこひにしなずばくはこにぞ、　御押紙事文玉屑二十四昆蟲部云。高辛氏之世。蜀人被賊掠去。妻哭之立誓曰。得夫歸者卽以吾女娶之。家有一馬。跳躍而前。遂解韁而去。賊中。其夫見馬乘之奔歸家。馬求與女配。嘶鳴不已。父曰。人畜非類。遂殺馬。曝皮於庭。女往觀之。皮捲女飛入桑樹上。食葉化爲蠶。作繭成絲。後人塑女像。謂之馬頭娘子。以祈蠶事。今蠶頭似馬頭也。

又同卷走獸部云。太古時有人遠往。家唯一女并馬一疋。女思父戲謂馬曰。爾若迎吾父。回我則嫁汝。因逸去。父乘馬歸。馬見女輒嘶。父知之乃射殺馬。剝其皮于庭。女嬰皮。皮卷女于大樹間。女化爲蠶。績絲于樹。而成大繭。今世人謂蠶爲女兒。搜神記謂蠶爲馬明菩薩。又曰馬頭娘。是此謂也。出古今註。　御押紙馬頭娘　蜀之先有蠶叢帝。又高辛時蜀有蠶女。不知姓氏。父爲人所掠。惟所乘馬在。女念父不食。其母因誓於衆曰。有得父還者。以此女嫁之。馬聞其言。驚踊振迅絶其拘絆而去。數日父乃乘馬而歸。自此馬嘶鳴不肯齕。母以誓衆之言告父。父曰。誓於人不誓於馬。安有人而偶非類乎。能脫我於難。功亦大矣。所誓之言不可行也。馬跑。父怒欲殺之。馬愈跑。父射殺之。曝其皮於庭。皮蹶然而起。卷女飛去。旬日皮復棲於桑上。女化爲蠶。食桑葉。吐絲成繭。以衣被於人間。一日蠶女乘雲駕此馬。侍衛數十人。謂父母曰。太上以我身心不忘義。授以九宮仙嬪矣。無復憶念也。

夜もあけば　狐をきつとよめる歌、萬葉十六に見えたり。

刺名倍爾湯和可世子等櫟津乃檜橋從來許武狐爾安武佐武

くりはらのあねはの松の　くりはらの、異本くわはら、是は強不用。あれは異本あねは、是は兩說云云。あねは奥州の名所也。古今に、おくろさきみつのこしまの人ならば都のつとにいざといはましをといふを、云ひかへたる清用之 一說也 嗣不拾ばかりなり。此女都へもさそはるべき人ならば、さそひも行くべき物をと也。勝地は主なしと云へり。松のごとくならばさそはんとなり。つとは裏也。都のみやげにつつむ土產をいへり。又の義は、業平の此女に心をばいれずして、ただ此松を打詠て興じたるなり。三つの小島の人ならばといへる如くに讀めるを、此女は我を思ひて云へるにやと思ひて、悅て思ひけりとぞ

云ひけるとなり。上の説は表の義、後の説本意の義也。

むかしみちのくにて云云　なでうことなき　なんでうとも、ただなでうとも讀む也。宜也。　御押紙愚案御抄云、愚、無何條事也。なに程の事もなきと云也。惡からずよからぬを云ふ。此詞源氏あづまやの卷にもあり。道、人をあなどつて云辭也。させる人にもあらざるを云ふ。肖、何ばかりの人にもあらずと云心也。枕草紙源氏物語にも、させる人にもあらざる由みゆ。稱、可然人を云ふ也。無子細と云心也。私云、愚見抄、道遙院筆の惟清抄、肖聞此三説と、稱名院聞書之抄と其心異也。今源氏物語の抄を勘ふるに、三光院抄の東屋の卷には、なでうことなきは、さしもなきと云詞也。伊勢物語のは心はかはれりと云云。稱名院筆の源氏抄には、伊勢物語は無子細也。是は又心かはる由見えたり。私云、かれこれを思ふに、いづれかまことならん。又師説云、なでうとあれども、なんでうと少しはぬる、口の中に讀む也。何ばかりの人にも非ず、さしもなき人と云心なりと云云。

あやしうさやうにて　同御抄云、愚、始終かよはすべき女とも覺えぬを、あやしく思ひて、其心をしらまほしく思ひて歌をよみてやる也。あやしうさやうにて、貞女也。

忍ぶ山　詞やさしく心めづらしき歌也。古今の人の心のくまごとにといへるも、心は同じけれども、立かくれてふと見つけんと云處誹諧也。如此事歌よむ人は可分別也。榮雅此歌にて、

いかにして人目忍ぶの山ふかみ思ふ心の奥をしらせむ

女限なくめでたしと思へど　女下には靡きたる體なれども、上に撓まず夷心を作てゐる程に、それを見て業平の如何にしてよりつかんぞとなり。

むかしきのありつね　紀氏は平群の臣のすぢなり。

世かはり時うつりにければ　惟喬を超て清和の御位につき給ふなり。

御押紙三代實錄第一云。天皇諱惟仁。文德天皇之第四子也。母太皇大后藤氏。太政大臣贈正一位良房朝臣之女也。嘉祥三年歲在庚午三月廿五日癸卯。生天皇於

太政大臣東京一條第。十一月廿五日戊戌立爲皇太子。于時誕育九月也。先是有童謠云。大枝乎超天走超天走超天躍止利騰加利超天我耶護毛留田耶仁搜阿左理食無志岐耶雄雄伊志岐耶。識者以爲大枝謂大兄也。是時文德天皇有四子。第一惟喬親王。第二惟條親王。第三惟彦親王。皇太子是第四皇子也。天意若曰超三兄而立。故有此三超之謠焉云云。

初天皇生日木菟入于產殿。明旦譽田天皇。喚大臣武內宿禰語之曰。是何瑞也。大臣對言吉祥也。復當昨日臣妻產時鷦鷯入于產屋。是亦異焉。爰天皇曰。今朕之子與大臣之子同日共產。兼並有瑞。是天之表焉。以爲取其鳥名。各相易名子爲後葉之契也。則取鷦鷯名以爲名太子曰大鷦鷯皇子。取木菟名號大臣之子曰木菟宿禰。是平群臣之始祖也。日本紀上

世の常の人のごともあらず　有常は惟喬の外戚なるほどに尋常の人よりも衰たるなり。あてはか、貴當或は當の字ばかりをも讀む也。とこはなれて、常を離るる也。又床也。桃之夭夭其葉蓁蓁。之子于歸宜其家人。注詩周南、桃夭之篇。夭夭少好貌。蓁蓁美盛貌。興也。之子猶言是子。此指女子之嫁者而言也。婦人謂嫁曰歸宜猶善也。大學九章　夫の家に行くを歸と云なり。夫の家へ婦の歸と云義也。是も親の家に不可歸之義也。是は女の性を謗也。有常が衰たるに依て、今とこ離るるは堪忍性なき人と見えたり。又夫婦之好終身不離。後漢八十四

あまになりて　洛陽阿潘、僧史略又曰。漢明帝既聽列峻等出家。又聽洛陽婦女阿潘等出家。此蓋中國尼之始事物紀原第七詩學大成引之

まことにむつましき　又の義に、夫婦と云ふばかりにて、いもせの契などはなかりしかども、今わかるるはかなしかるべしと也。

手ををりて云云　十といひつつ　有常は年もよりたる者なれば、四十年この義可然歟。

よるの物まで　よんの物と云樣に讀む也。

年だにもとをとて云云　幾度君を　有常を女の賴む也。別るる女の心中

さこそと云へり。又の義、女の別を有常うらみんもことわりと、有常をすかす義もあり。

これや此　此給はるきぬは天羽衣なるべしと云ひて、げにもや業平は青雲殿上の人なればと也。此歌は衣裳をほめたるばかり也。謝する心はなき程に、秋や來るの歌をそふる也。

あだなりと　闕疑抄の義也。又花は年年咲けども只我身こそあだなる者なれとなり。年年歳歳花相似。歳歳年年人不同。

けふこずば　或抄、此歌は贈答の本ともなるべきとなり。

むかしなま心ある女ありけり　なま心、なまじひの心也。善惡にかたつかぬ心也。

紅ににほふはいづら　紅は愛著の色也。好色の方へとる也。業平の好色はそと菊のうつろひたる如く也。こなたへ心のうつらぬとなり。

紅ににほふがうへの　紅にうろひ、又白き所のある菊は、只折りたる人の袖かと思ふとばかりなり。別の義なし。

石川女郎贈大伴宿禰田主歌一首（御抑氏　卽佐保大納言大伴卿第二子母巨勢朝臣也）

遊士跡吾者聞流乎屋戸不借吾乎還利於曾能風流士

大伴田主字曰仲郎。容姿佳艶。風流秀絶。見人聞者靡不歎息也。時有石川女郎。自成雙栖之感。恒悲獨守之難。意欲寄書未逢良信。爰作方便而似賤嫗。己提鍋子而到寢側。哽音跼足叩戸諮曰。東隣貧女將取火來矣。於是仲郎暗裏非識冒隱之形。慮外不堪拘接之計。任念取火就跡歸去也。明後女郎既恥自媒之可愧。復恨心契之弗果。因作斯歌以贈諺戯焉。

大伴宿禰田主報贈歌一首

遊士爾吾者有家里屋戸不借令還吾曾風流士者有萬葉

むかしをとこ宮づかへしける女のごたちなりける人を　宮づかへ、禁中の宮づかへ也。ごたち、後達也。宮づかへの總名なり。

後漢書皇后記注鄭玄曰。禮記曰。后之言後也。在夫之後。故以女謂後達。河海御

達（ごたち）白氏文集 河海 日本紀

君が爲たをれる枝は　返事は時時は、へんじと讀みても不苦也。

むかしをとこいとかしこく云云　かかる歌をなむよみて　よんでと讀む也。

此女かく書きおきたるをけしう心おくべきこともおぼえぬを　けしう、事の外にと云心也。思ふかひ、闕疑抄の如く、我身にもあやまりやあるらんと業平讀む也。

君子有諸己而後求諸人。無諸己而後非諸人。大學九章注　有善於己然後可以責人之善。無惡於己然後可以正人之惡。皆推己以及人。所謂恕也。環翠軒抄云、孝悌慈を己行て後に人にせよと云。己惡を行はずして後に人の惡をそしる、正也。或抄云、君子桂芳性。春濃秋更繁。小人槿花心。在朝夕不存。業平は桂芳の性、女は槿花の心の如しといへり。

人はいさ　萬葉に人者縱念息登母云云と云歌あり。此歌を改めて物語の歌とせる歟。又自然讀合せたる歟。愚案（御押紙）御抄云、私云萬葉を勘に玉鬘面影とつづく歌不見。萬葉二、人者縱念息登母玉鬘影爾所見乍不所忘鴨。もし此歌を改めて此物語の歌とせるにや。偏に管窺の新說也。此萬葉の歌の玉鬘は冠の纓を云也と云云。又人者縱も此物語の歌とは心殊なる歟。萬葉のはたとひと云心と見えたり。

いまはとて　草の種なればまくと云ふにそへたると云說、僻事也。或抄云、萬言萬當亦不如一默。百戰百勝亦不如一忍。不如一忍と云ばかりに引也。女の堪忍性なきを云也。

わすれ草ううと　女は今はとてなどと心短く讀むを、業平はのどかにゆうゆうと讀む也。面白也。

わするらむと　如此のとの字、何時も次の句に付て讀也。

なか空にたちぬる雲の　心（御押紙）かろく出家をし、心かろく立歸りなどしたるは、半天の雲の、時の間に聚り、時の間に散じ、跡もなきが如し。此我ふるまひ

を思へば、身もはかなく詮もなく成りにける哉と云也。

とはいひけれど　肖、此詞は歌よりつづけてみるべしとあれども、歌につづきたる詞とはみえず。此一段心を持ちて云ひたる詞也。かやうに度度云ひかはしたれどもつひに絶えたると也。

むかしはかなくてたえにけるなか　肖、はかなく。何とやらんぞ絶えたるなるべし。

うきながら　頼みがたき物は人の心とはみながら、思ひそめたる人は忘れがたき物となり。かつはかくなり。又はさの心也。

さればよといひて　業平忘れぬ上に、女のかく歌をよむほどに、我もさやうに思ふとなり。さればよと詞にいひて、歌に詞がつづかぬほどに、更に心を起して讀むといふ也。三條義には、業平の我を忘れまじきものなると思ひたれば、案の如く歌をよみておこせたるほどに、さればよといふ義也。

あひみては　河島は行きめぐり又逢ふ義也。又の義には心をかはすとうけたる心なり。

とはいひけれど　歌には水の流の絶えしなどと、いういうと行末遠きことをいひたれども、なほたへかねて、其夜いきたるなり。

秋の夜の　はし鷹のとかへる山の椎柴の葉がへはすとも君は忘れじ。此歌を引くは不用。山はさけ海はあせなむ世なりとも君に二心我あらめやは。鎌倉右大臣長しとも思ひぞはてぬ昔より逢ふ人からの秋の夜なれば。此兩首を引也。

愚案御抄云、なずらへてと云詞の注諸抄に不見。今案、秋の夜の千夜を一夜にたとふるほどの長き一夜を、八千よねばやとなり。擬字也。

秋の夜の　心は分明也。但千年萬年契るとも、人間の一生つひにむなしからむと云義もこもるなり。

昔ゐなかわたらひしける人の子ども　ゐ中わたらひ、鄙活眞名伊勢物語此段はつくり物語也。はぢかはして、か文字清也。

つつゐつの　つつゐのゐづつと云詞也。つは付字也。つけ字とやすめ字とは、少かはりあるなり。瀧津瀬などの類也。つつゐつの井筒のたるひとけぬまにはやくもくるる冬の空かな。

御押紙 幹　文選謝元暉詩。注銅雀臺一名井幹樓。漢書武帝、立井幹樓高五十丈。音韓。師古曰積木而高爲樓若井幹之形也。井上木欄也。字亦作韓。其形四角或八角。又謂之銀床皆井欄也。楊子重黎篇。或問茅焦歷井幹之死。司馬注曰。幹音韓。始皇殺諫者二十七人。積之死闕下。如井幹之狀。

過ぎにけらしな　過ぎにけりなの心にても有る歟。又ゐづつに只今くらぶると云にてもなきほどに、我たけも過ぎぞしつらんにてもあるべき歟。

くらべこし　女子許嫁笄而字。注許嫁則十五而笄。未嫁則二十笄。亦成人之道也。故字之。禮記 天武天皇十一年六月丁卯男女結髮。愚案御鈔云、或人抄、ふりわけがみは幼き者の髮也。私云、萬葉十六に、たち花のてれるながやにわがゐねしうなゐはなりは髮あげつらむか。注うなゐはなりは男せざる女子也。髮あげつらむは男しつらんなり。愚案の說ながら自愛云云。

この女いとようけさうして打ながめて　けさうして、し文字濁也。實條公說し文字清む由也。

女おやなく　親のなきが如くになると云義不可然、只沒したるなり。大和物語を引くこと不用。

風吹けば　よわともよはとも讀也。白浪を盜人のことにしたること日本のものには多也。拾遺九廉義公のかみゐに旅人の盜人にあひたるかたかけるところ、藤原爲賴、ぬす人の立田の山にいりにけりおなじかざしの名にやけがれむ。六百番夜戀寂蓮、わすらるる身をば思はで立田山心にかかる沖つ白浪。これは物語の歌をとりてよめるとみえたり。盜人の心に用ふる歟。新勅十不偷盜戒、こえじただ同じかざしの名もつらし立田の山のよはの白浪。法眼宗圓歌也。此歌は拾遺と此物語との兩首をとりて、白波を盜人に用ひたり。如此こと雖有之、此歌の白波盜のことをいふ證據に用ふる

にはあらず、白波を盜に用ふるの證據也。

御抑鈔愚案御鈔、或祕抄云、夜半、古くはよはと讀む、今はよわと用也。又或祕抄に、盜人を白波といふこと、文選云、梁武帝御宇白波綠林在二人。入海登山盜天財入地盧と云り。此は梁武帝の時二人の盜人あり。一人は山に居て綠林と成て、人のとほる時まきこめて物奪取れり。白波と云は海に居て、白波と現はれて船をくつがへして物をとれり。皆以術する也。終に廣契と云將軍にころされぬ。地盧と云は、方一里に土穴を掘りて中にすみけり。後にはうめり。此心を以て盜人を白波とも綠林ともいふなり。又或抄に、梁武帝の世に、暴龜と云二人の盜人あり。盜天財入地盧。成綠林走山掠國。成白波踊海覆舟云云。私云韻府波字引事始記曰。卷白波酒令名。起於東漢(溪)禽白波賊如席卷。酒席言之。以快人意。又三體絕句。蜀江雪浪西江滿。抄云小補云蜀有白浪谷乃盜賊所居也。雪浪亦謂之。

いひかひ　飯匕也。長明無名抄に、河內國たかやすの郡に、在中將のかよひ給ひし所、今中將かき內と名づけたり。則是也云云。

君があたり　伊駒山いさむる嶺にゐる雲のうきておもひのきゆる日はなし。定家

あづさ弓　弓をかさねたるは年序のへたる心なり。古注の三張の弓の義にあらず。年をへてとつづけたるには別に子細なし。但あづさ弓年をへてとつづけむよりは、梓弓眞弓つき弓といひては、年序を歷る心あるなり。

うるはしみ　友善(うるはし)日本紀　麗　正　直　三字ともにうるはしきと訓也。

をよびのちして　和名卅八指、唐韻云指(旨反和名由比俗云於與比)手指也。栂、國語注云拇(母反和名於保於與比)大指也。中指、儀禮云中指(和名奈加乃於與比)三指也。季指、儀禮云季指(和名古於與比)小指第五指也。齧其指出血。注師古曰。自齧其指出血以表至誠而爲誓約不背漢也。前漢張耳傳

そこにいたづらに　いたづらに、鬼一口にくひてけりなどの類なり。

さすがなりける　眞實の貞女也。あふまじきともいはでさすが不逢也。

秋の野に　不逢歸戀也。時は秋朝、所は野、篠、いづれも露の多かるべき也。

みるめなき　我身は女の身也。我をみるめなき浦とはしられぬかとは、中將のあだあだしき心を、我知りたるを知らずして、我見知らざるやうに覺召して、なせに通給ふぞと不審していふなり。

わびたりける人　染殿后と云説、あるじゆるしてけりなど云より取出す歟。ただ媒介などの義可然歟。

おもほえず袖にみなとのさわぐかな　（御押紙）業平の心中をおしはかりて尋ねらるる志の祝著の餘に、落つる感涙は袖の湊に唐舟のよりしばかりなり。われば（なみだ天福）かり　我程也。物思ふ人ただひとりと思へば水の下にもあるなり。

げにもかな、水の下なる人は我にてあるほどにと、自問自答したるなり。

もろこゑ　この字濁三説也。也足軒などは清みて讀む云云。上の歌に水の下にもといふをうけて水口といふなり。もろ聲、幽齋なども濁ると云云。

むかしいろこのみなりける　などてかく　かたみはかごなり。私、後撰戀



一、うれしげに君がたのめし言の葉はかたみにくめる水にぞありける。讀人しらず。

むかし春宮の　花の賀　二條后の二十賀などいふはすぢなきことなり。二條后、元慶六三二七於清涼殿皇太后四十之賀等あり。（但云年滿四十）業平四年沒、明子は貞觀九、四十也。業平に三歳の妹也。或は只春宮の女御の賀と見るなり。（御押紙）三代實錄云、元慶六年三月二十七日己巳天皇於清涼殿設祕宴慶賀皇太后四十之算也。皇太后去年春秋滿四十。天下遏密不申勸讌故筵而行之云云。私云これは二條后御賀也。業平元慶四五卒。五十六歳　此御賀業平沒後二年後也。在中將は二條后に十八歳の兄也。明子は貞觀九御歳四十也。時に中將四十二歳也。貞明親王（陽成院）貞觀十一年二月爲皇太子也。

めしあづけ　召加られたるにや。

花にあかぬ　今日のこよひにあたらずに見よとあり。但あたりて見るも却て有興歟。

御押紙愚案御抄云、肖、けふのこよひといふを、つよくあたりていはで、大やうにうちながめていふべし。

御押紙花にあかぬはめづらしからねども、時は春といひ、御賀といひ、四美具二難并たる時節、今日のこよひに似る時はなきなり。なげきは感情也。

あふ事は玉のをばかり　念珠の玉を一つくる間也。

ならむさがみむといふ　さがは不祥也。また世のさがなどいひて、ならひといふ心なるもの多し。ここもならひにても無相違、まづは不祥也。

御押紙愚案御鈔云、或抄續萬葉第八に、わすれゆくつらさはいかに命あらばよしや草葉のならむさがみむ。石上乙丸歌也。それをとりていへり。

つみもなき　うけへ、祈の字を訓むなり。忘草おふといふも死ぬることなりと愚見抄にあれども、さまではなし。只草ばかりなり。草といふは惡事といひたる心也。

いにしへのしづのをだまき　此歌古今になし。

こもり江　かくれぬの類也。

よしやあしや　よきかあしきか無子細と思ふが、何とあるべきぞといふやうなる心なり。

いへばえに　いはんとしてもいはれざる意也。いはねば胸にさわぐも心なり。とかく用心のなすわざなり。

おもなくて　面目なけれどもなどといふ心也。

玉の緒を　あはをはあはしく合たる緒也。それは結句よくあふものなり。

玉緒乎沫緒二搓而結有者在手後二毛不相在目八方。萬葉第四

むかしわすれぬる　とひごと　忘れぬるかと問ひて恨るなり。

御押紙愚案御抄云、肖、花にも下紐といへばかくいへり。愚、花のひらくるをば、ひもとくといへば、朝顔にそへてよめるなり。

ふたりして　人に逢ふまでの事はおきて、われひとりしてもとくまじきとなり。二爲結之紐乎一爲而吾者解不見直相及者。

むかし紀のありつねがり　がりは所也。

さい院のみかど　さいゐのみかどと讀むなり。

續日本後紀第九、承和七五月丙子朔。（御押紙）　辛巳。後太上天皇顧命皇太子曰。予素不尚華飾。況擾耗人物乎。歛葬之具。一切從薄。朝例凶具固辭奉還。葬畢釋縗。莫煩國人。葬者藏也。欲人不覩。送葬之辰宜用夜漏。追福之事同須儉約。又國忌者雖義在追遠。而絆苦有司。又歲竟分綵帛。號曰荷前。論之幽明。有煩無益。並須停狀。必達朝家。夫人子之道。遵教爲先。奉以行之。不得違失。重命曰。予聞。人沒精魂歸天。而空存冢墓。鬼物憑焉。終乃爲祟。長貽後累。今宜碎骨爲粉。散之山中。於是。中納言朝臣吉野奏言。昔宇治稚彦皇子者。我朝之賢明也。此皇子遺教。自使散骨。後世效之。然是親王之事。而非帝王之迹。我國自上古。不起山陵。所未聞也。山陵猶宗廟也。縱無宗廟者。臣子何處仰。於是更報命曰。予氣力綿惙。不能論決。卿等奏聞。嵯峨聖皇。以蒙裁耳。癸未。後太上天皇崩于淳和院。春秋五十五。戊子。勅遣左近衛少將從四位下橘朝臣岑繼及四衛府監尉志已下三十二人於淳和院。監護裝束山作養民司等。遣詔不受矣。此夕奉葬。後太上天皇於山城國乙訓郡物集村。御骨碎粉。奉散大原野西山嶺上。葬則滇切說文驛藏也从死在艸中一其中所以薦之易占者葬原衣之以薪徐日一狀其薦耳集韻或作䕶亦作䕶漾韻會　喪古文作䕶惙株劣切憂也一曰意不定也一曰披也廣韻疲也

はふり　はうむりと讀む也。となり、あながち隣家ならずとも近邊なるべし。

いとひさしうゐていでたてまつらす云云（此すの字濁之說）打なきてやみぬべかりける哀をかけて歸らむとせし也。

天のしたの　天の下の色好みと云心也。大方の事にては如此の時節けさうはなりがたき也。

なまめく　嬪歌なまめいたり哥娛已上同婀娜なまめく此なまめくはけさうしたる心也。

車なりける人　女也。

けちなむずるとて　す文字濁也。清ても讀也。（御押紙）愚案御抄云、螢を取りて、愚、女

の顔をみんとて螢を車のうちへ入れたるなり。色好のひとなれば、かかるやうにかねて螢を紗のふくろなどに集めてや持ちたりけん。このほたるの光にや見ゆらむとて、ほたるを取りかくしたるを、ともしけちなむといへり。

いでていなば　愚見の義は誤なり。只此葬送のかたばかりに見る也。出でていなばとは、此崇子内親王を鳥邊野へ送りまゐらせたらば、此世の限なるべき也。ともしけちとは、此螢をけすことにかけて命の消ゆる事にたとへたり。灯の消ゆるが如くなるべし。佛涅槃をも如烟盡灯滅といへる心あり。さて年へぬるかととは、此別を諸人の歎く心は、老少不定とは云ひながら、此宮はさかりの年薨じ給へるを一入歎く故に、泣聲をきけ、誠に灯の滅たる如にはなきかと云ひかけたる也。泣聲をきけとは、至が似合はぬけさう心をいさむる也。ともしけちとは螢の火をけつ事なれば、命の事也。續日本後紀十八（承和十五　嘉祥元）五月己未朔。日有蝕之。（十五日也）癸酉（上略）無品崇子内親王薨。淳和太上天皇之皇女也。母橘氏云。遣兵部大輔從四位下豐江王。并五位三人。監護葬事。崇子内親王母大原鷹子。異本橘船子正四位上清野女。

（垂仁紀第六押紙通一公）九十年春二月庚子朔。天皇命田道間守。遣常世國。令求非時香菓。（香菓此云箇具能未）今謂橘是也。九十九年秋七月戊午朔。年百四十歳崩於纒向宮。明年春三月辛未朔壬午。田道間守至自常世國。則賫物也非時香菓八竿八縵焉。田道間守。於是泣悲歎之曰。受命天朝。遠往絶域。萬里踏浪。遙度弱水。是常世國。則神仙祕區。俗非所臻。是以往來之間。自經十年。豈期獨凌峻瀾。更向本土乎。然賴聖帝之神靈。僅得還來。今天皇既崩。不得復命。臣雖生之。亦何益矣。乃向天皇之陵。叫哭而自死之。羣臣聞皆流涙也。田道間守是三宅連之始祖也。

橘歌一首

可氣麻久母安夜爾加之古志。皇神祖能可見能大御世爾。田道間守常世爾和多利。夜保許毛知麻爲泥許之登吉。時之支能香久乃菓子乎。可之古久母能許之多麻敝禮。國毛勢爾於悲多知左加延。下略

猶ぞありける　種種の義あれども、只天がしたの色このみよく返歌をしたるとなり。

むかしわかき男　けしう、けの字清。げすしうはあらぬ也。ほめたる心也。又けは怪也。愚、けしうは下習也。しなはいやしけれど、かたち心ばえけしうはあらぬと云へり。稱下ざまになきと云心なり。いかさまにげすしからぬ人なり。

さかしら　さかしだて也。情進萬十六情書同上母儳言禮記注儳暫也又參錯不齊之貌韻會輕賤貌廣韻輕言又參禮

おもひもぞつくとて云云　すまふちからなし　情來不自禁。遊仙窟不敢推辭。同拒。擔。

おひうつ　文選、馬融が笛賦。放臣逐子離友。注翰曰。放逐謂還於遐荒。逐子謂逐出之者。

御押紙血のなみだ　御抄云、私云、血涙濫觴娥皇女英也。韻府竹部云。舜南巡不反。葬於蒼梧。娥皇女英追之不及。至洞庭山。涙下染竹。卽斑。死爲湘水神。博物志　方輿勝覽廿四。道州部云。斑竹岩在營道縣南五十里。多小斑竹。相傳云。舜葬九疑。二妃尋湘水。以手拭涙把竹。遂成斑竹。也云云。才調集。斑竹詩云。殷痕苦雨洗不落。猶帶湘娥涙血腥。

いでていなば　此上は我も死別なるべければ、女もさ思ひて執心を殘すなとをしへたる也。又云。有りし比は親別れよと諫めつれども、互に別れがたくて過ぎしに、既に出ていぬる上は、我も此世の別可易、君も出て行事を思切れと云ひて慰めたるなり。來し方もたへがたかりしが、今日は勝て悲しく覺ゆれば、必清果て可別と也。此歌は續後撰十三に入、五文字いとひてもとあり。家集にはいとひても何か別のをしからむ。結句かなしさとあり。是は心かはるなり。

おやあわてにけり　女の親は普通の說也。業平の親なり。

猶おもひてこそ　女の親とみゆる也。業平の爲を思ひてこそとなり。又の

義、互の爲を思ひてこそとなり。

むかしのわか人　或　は伊勢が詞也。

いやしき男　此女妹なるべし。

あてなる男　肖此女は姉なるべし。

うへのきぬ　袍うへのきぬ。和名四

ろうさう　ろうもさうも去聲に讀也。

丈人屋上烏。人好烏亦好。云。涙曰詩贈烏（御押紙）

愛止于誰之屋注富人之屋烏所集也修可曰尙書大傳曰武王登夏臺以殷民周公旦曰臣聞愛其人者愛其屋上烏希曰劉向說苑云大史謂武王曰愛其人兼屋上之烏憎其人者惡其餘胥非周公之言

人生意氣豁不在相逢早。趙曰北史李延壽叙傳載閻信謂其祖李曉之言曰古人相知未必在早

南京亂初定所向色枯槁。趙曰南京成都府也蕭宗至德二年以蜀郡爲南京所謂亂初定言所年辛巳之年四叙南東川節度段子璋反五崔光遠擊斬之

遊子無根株。茅齊付秋草。東征下月峽。桂席窮海鳥。涙曰謝靈運詩桂席拾海月又海賦維長綃桂長席

萬里須十金。晁曰漢書曰金中人十家之產師古注古者一兩金直十千十金則知百千

妻孥未相保。蒼忙風塵際。蹭蹬騏驎老。涙曰蹭蹬志馬失勢貌

士懷感傷。心胸已傾倒。坡廿一送宋構朝散知彭州迎待二親

東來誰迎使君車。知是丈人屋上烏。緯杜詩丈人屋上烏烏好人亦好師劉向說苑大公謂武王曰愛其人者兼屋上烏憎其人者惡其餘胥

丈人今年二毛初。厚清安仁秋興賦余春秋三十有二始見二毛左傳君子不禽二毛謂頭白有二色者也

（御押紙）御抄云、或抄、舒明天皇の御時、笠清丸と云ふは、武藏介にて住ける時に、上洛すとて妻をとどめて上りぬ。妻跡にて病して死ぬ。後夫下りて妻の死したる野を見れば、紫の袴を見て主はなし。是くさりて紫となる。是より紫の一本ゆゑに草木までも、武藏野の中はなつかしと云へり。或抄に、紫は武藏に生る草也。頓阿注云、紫一本は橘是公大臣妻武藏國にて死す。其墓より紫は生るなり。

むらさきの　御抄云、或祕抄に、目もはるは目もはるかに見渡す野邊の草木、何もむつましき心也。

むかし男色このみと云云　色好としるしる　如此の女には心のとまるまじき事なれども、何とやらん心のとまるとなり。

されどにくくはたあらざりけり　好色の人なれば、我のみを不可憑と思ふ事也。されどもにくくは不思。此女業平の心にあひたる也。

しばしばいきけれど猶いとうしろめたく　外へ心の不移樣にと屢〻通也。
切切通へども猶うしろめたき也。
さりとていかではたえあるまじかりけり　最前の如く、我獨を可憑人に
あらずとうしろめたくは思へども、心にあひたる故に不行してもえある
まじきなり。
猶はたえあらざりける中なれば　我と我心をいさめて捨てんと思へど
もすてがたき也。それをえあらざりけると云歟。將有漸之辭。蘇林曰。將甫始
之辭。一日旦也。與也。偕也。人抑然之辭。
むかしかやのみこと申す云云　かやのみこ　三代實錄廿。貞觀十三十月
八日庚戌。二品行大宰帥賀陽親王薨云云。榮花物語、法成寺の萬灯會のさま（御押紙）
ざまのたくみをつくしたる所に、昔かやのみことといひし人こそさいくは
いみじかりけり。それもがなといひ出でけりとあり。
ほととぎすなが鳴　うとまれぬはおはんぬ也。伊勢物語眞名本に、物から
と云ふに乍の字を書也。歌の心は切に思へどもうとましきと恨みたる心
也。
けしきをとりて　愚に、機嫌をとりてよめるとあり。同じ事ながら氣色（きしよく）と
云ふべき也。
名のみたつしでの　愚見委見えたり。名のみたつとは、郭公のあまたの里
に鳴くよしの名にたてらるるをいたみて、我は餘所に通ひて鳴く事もな
きものをと、うらめしさに今ぞ鳴くとよめる也。うたがはれたるを悲むの
義也。今朝は必朝には有るべからず、今と云也。
庵おほき　前の汝なくの歌とは引かへたる體也。
むかしあがたへゆく人に云云　いへとうじ　貧夫厥家。注　婦謂之家。楚辭
一離騷一
ものごし　物ごしと云說不用。裳の腰なり。裾侵（ものこしゆるく）白四陵園妾
出でてゆく　もなくは裳をかくし題によめり。ぬぎつれは餞の心也。我さ

へもなくとは、著したる裳をぬげば喪なくなると云義也。喪の字をばわざはひと訓むなり。人をいはへば我もわざはひなき心也。此もなくの詞は、萬葉の事母無裳無母阿良牟遠、此也。孫叔敖爲嬰兒之時。出遊見兩頭蛇。殺而埋之。歸而泣。其母問其故。叔敖對曰。聞見兩頭之蛇者死。向者吾見之。恐去其母而死也。其母曰。蛇今安在。曰恐他人又見殺而埋之矣。其母曰。吾聞有隱德者天報之以福。汝則不死也。及長爲楚令尹。未治而國人信其仁也。劉向新序第一雜事一

（御押紙）

稱、女にかはりて讀みたる也。花むけはさいの神につつがなくと手向る心也。我さへもなくは、此方にとどまる我もわざはひなくと云心なり。

心とどめてよます　よますとは女によまするなり。業平女にかはりて讀みて、其歌を心とどめて女に吟じさするなり。又義、此歌を讀上たる事也。

むかし男ありけり人のむすめの云云　かくこそ思ひしかと　誰にても、したしき人云ひたるなるべし。

夜ふけてややすずしき　仲夏苦夜短。開軒納微凉。虛明見纖毫。羽蟲亦飛揚。

杜詩二　螢火亂飛秋已近。元愼

ゆく螢　比は六月の末なれば、宵の程は暑氣はなはだしき樣なるが、夜更けて身にしむ風たちて、さながら仲秋の天の樣に覺ゆる折節、螢の高く飛びて雲の上まで行くやうなり。されば雲の上までいぬべくは、雁をも催したてよと云也。又秋風の吹く如く、我物がなしき事を、我かく忌にこもるをも、亡魂にもつげよと云義も下の心は有るべき歟。

暮がたき　是は業平籠居の心に成かはりて可見也。夏などは春秋などのやうにながめがちなる比にてもなけれども、我身ゆゑにうせにし人と思へば、かなしさの限りなく、何となく籠りをれば、ながめがちなると也。又一度も逢ひみぬ人なれば、何事にも思ひ出す事はなけれども、世間の道理にて悲しきと也。前の歌と同時には不讀歟。何樣籠居たる時なるべし。

めかるれば忘れぬべき物に　世の中の人は忘れぬべきもの也。我は片時も不忘と云也。人生不相見動如參與商。杜詩一

おほぬさの　大幣、大麻。大麻は神道に用ふる所、あまたの手にふるる物に非ず。觸に付て口傳有之云云。舊院なども如此仰せられし也。神道にはさもこそあらめ、祓具なればあまたの手にふれて、流し捨ると云ひて可無難也。

御押紙抄云、顯昭云、おほぬさとは、祓するに陰陽師の持ちたる串に指たる四手也。祓はてぬれば是を各引よせつつなづる物なれば、人のもとごとによれどもとどまらで過ぐるものなれば、引手あまたにとまらねばと讀める也。

定家卿同顯昭說　或祕抄に、大幣と書けり。幣帛を持ちて人の前ごとによれば、引よせて各各呪ひて後に河へ流す物也。是に依て引手あまたと讀めり。又或抄に、大ぬさはみてぐら又は榊に麻のをつけたるをも云ふ。此ぬさはみそぎなどする時、あまたの手に取りうつして、身の祈をする物なれば、獨にとどまらぬ男の心をたとへて、思へどもえたのまずとはいへるにや。

今ぞしる　此歌は第三句より起して讀む也。家集古今詞書大概同じ。又少少異なり。

うらわかみ　ねよげは寢と根とにかけて云へる也。古者以弱草喩夫婦。日本紀仁賢紀注

初草の　謂忠誠事君分。楚辭　うらなくは、二つなく底に徹して憑むなり。

むかし男有けりうらむる人を　うらむる人を、業平をうらむる女をうらみかへすなり。

行水に　水上如數書吾命妹相受日鶴鳴。萬十一　譬如鏤氷畫水有勞無益。三教指歸

行水と過る　前の歌にいへる物を取聚めて讀めり。乘鶴下揚州と云ひたる類也。

あだくらべかたみにしける　愚、あだなる事をたがひに云ひかはしたる事、男女のしかも又ともに忍びありきしける事なるべしと、物語の作者筆をくはへたるなり。

むかし男云云　うゑしうゑば　ううるとううるならばと也。花をも賞し

あるじをも祝したる歌也。梅櫻などにても、人のうゑし時の歌など、是にて思慮すべし。

御押紙 菊譜叙云。花瓣扶疎者多落。盛開之後漸覺離枝。遇風雨撼之則飄散滿地矣。史正志事禮菊

御押紙 御抄云、或祕抄云、抑菊に花散ると云ふ事難心得。菊は花散事なし。但花は散る物なれば、萬の花におほせて散ると云ふなり。白樂天詩に、黃菊花濃風散砌。紫房匂盡雨香遲と云へり。是は菊のちると作れり。文集にあり。或口傳云、雨露にあたらぬ菊は散事おのづからありと云へり。私云、文選卅三。屈平離騷經云。朝飲木蘭之墜露兮。夕餐秋菊之落英と云へり。又詩學集成十に、黃昏風雨隕園林。殘菊飄零滿地金。歐陽公戲之曰。秋花不比春花落。爲報詩人子細看。菊不落也。此古事韻府菊字詳之也。

むかし男ありけり人のもとより云云　かざりちまき　天福本にかさなりちまきとあり。別に無子細、ただ書損じ也。

あやめかり　稱、ちまきのこと、あながち歌にはよまれねば、かやうによめる所歌也。五月五日。漢武帝取蜥蜴飼以砂。至明年五月五日搗以點宮人臂。宮人有犯則消。不爾則如赤痣。故名守宮。李賀玉白夜搗紅守宮。李商隱詩云。巴西夜市能守宮。後房點臂班班紅。古宮詞云。愛惜加窮袴。防閑托守宮。五月五日以五綵絲繫臂者。辟鬼及兵。一名長命縷。一名續命縷。一名辟兵繒。風俗通 歐詩云。五色双總獻女工。多因荆楚記遺風。又云。繡繭誇新巧。索絲喜續年。章簡公皇帝閣帖子云。清曉會披香。索絲續命長。一絲增一歲。萬縷獻君王。欒城帖子云飲食祈君千歲壽。良辰更上辟兵繒。抱朴子以五月五日。以艾爲人。置戶上。辟惡驅邪。屈原。以五月五日投於汨羅江。人傷其死。以舟楫拯之至此競渡是遺俗。屈原死。楚人哀之。以竹筒貯米。投水祭之。漢建武中。長沙區曲忽夢一士。云三閭大夫。謂曲曰。聞君見祭甚善。常年爲蛟龍所竊。若有惠當以菰葉塞其上。以綵絲纏之。此二物之蛟龍所憚。曲依其言。今本月日作粽是也。亦附時令門已上群談採餘卷第十考證部。五月五日。作粽并帶五花絲乃遺風也。風土記云。端午日。以菰葉粘米包之謂之角黍。宋時端午以菖蒲。或縷。或屑。泛酒。章簡公端午帖子云。菖蒲泛酒。

堯樽綠菰葉。索絲楚粽香。餘見考證門群談採餘第一時令門

むかし男あひがたき云云　いかでかは　おのがねにつらき別の有りとだに思ひもしらで鳥や鳴くらむ。此心似たり。

むかし男つれなかりけり云云　行やらぬ　詞書につれなかりけると云ふをよく吟じ合すべし。夢路とは夢中にも行通ふ事のかたき也。夢路をたどるとは、つれなき人なれば夢さへたえだえなる也。此たどる袖には、天津天なる露はおくべからず、思の露こそおくらめと云ふ心也。露やのやの字にあたりてみる也。天津空のつゆやおく、さはあるべからず、思の露にてこそ有らめと云義也。

昔男おもひかけたる云云　おもはずば　今は思はぬにこそ成りはてつらめど、來し方の言の葉を忘れがたくて、折節ごとに忍ぶ事也。初なほざりに思ひし時はかやうにはあらぬものをと也。古今、吉野河よしや人こその歌と同じ心也。

むかし男ふして思ひ云云　我袖は草の　秋の草庵の如く、常住露のやどり成けりと也。詞書は深切にみえて、歌は別の事なし。かやうの事は猶ふかくみるべき也。肖、前詞は切にして、歌は大やうに聞ゆ。但此心は秋の夕暮などの、草葉の露置餘りて、萬物哀なる折節、物思ふ身の打ながめたるに、袖の上はいつもの露けさなれど、只今見る所を感じて、草の庵にあらねど、くるれば露のやどりに成と云由也。淺淺と心得ぬれば詞に相違す。

むかし心つきて云云　そこのとなりなりける　長岡に伊豆内親王宮有りし其邊の宮達也。

ゐ中なりければ　此段悉皆誹諧に書なせり。道、都の外は邊土より田舍とも縣ともいへば、遠國近所によらず、夷中と云也。東西南北ともに同じ。

といひてこの宮に　御抄云、此宮は業平の家也。平城阿保等の宮の跡に住ひし故此宮と云也。

葎生て　歌の面は、鬼と云ふは人すまぬを云心也。下心は女を鬼といへり。

むかし男京をいかが云云　ひんがし山に　左遷の事などいへどもたしかならず。ただ面のままに見るべし。業平時にあはざる人なれば、ただ世上を觀じたるなるべし。

かくて物やみてしにいりたりければ云云　水そそぎなどして　水そそぎと云ふを體に聞ゆるやうに、水そそぎ○などしてと、此丸の所にて句を切りて可讀也。

我うへに　灑面などしたるをいへり。なほざりの露にては蘇生しがたし。

天河を渡るかいの雫などにてや有らんと云心也。古今にては心各別也。鳴渡る雁の泪や落ちつらんと同心也。

むかし男ありけり宮づかへ云云　心もまめならざりける　愚、女のあひしらひまめまめしからざる也。

しそうの官人　稱、文字の心はうかがひうけ給るなり。宇佐使の時むまやむまやの事など下にて物申付者也。さしもなき者也。國の人の中に勅使のやどにゐてまかなひする人也。十人廿人もある歟。諸國にある也。五月待花橘。御抄云、橘に付て昔の人の袖の香と云へる事、本據あり。（御押紙）

日本紀六。垂仁天皇九十春二月庚子朔。天皇命田道間守遣常世國令求非時香菓。（香菓此云橘是也。田道間守事　此事を讀める歌、顯注密勘云、萬葉私云　箇俱能末　今謂橘是也。既出省之）十八常世物この橘をいやてりにわがおほぎみは今もみるかと。間守が袖につつみてもて來りしかば、昔の人の袖の香ぞすると讀みたり。定家卿何の袖にても侍りなむ云云。抄、橘に昔袖をよみ合する事は、漢書に興芳七尺之廬橘纔傳左袖矣。

つくしにて　是もうさの使の時歟。

そめかはをわたらむ人のいかでかは云云　名にしおはば　常のあだあだしきと云ふには非ず、業平の我こそ好色人なれと打て出て名乗れば、それはそらごとにてあらんと云云。

むかし年ごろおとづれざりける女心かしこくやあらざりけむはかなき人

のことにつぎて云云　いとはづかしとおもひて　女の心には、我身のおとろへたる事を思ひて、いらへもせぬ也。

是やこの我に　女をおとして云とみる義あり。不用之。あふみのみは只付字也。

むかし世心つける女　年老いたる人の二度好色の心あるを云ふ。

心つける　心濁或清、つけるのつはいづれにても清。

いらへてやみぬ　ての字清或濁。

こと人はいとなさけなしいかでこの在五中將にあはせてしがなと思ふ心ありかりしありきけるにいきあひて云云　あはれがりてきてねにけり

光、女をあはれがるには非ず、三郎が馬の口をとりなどして、とかくするをあはれがる也。

在五中將　御抄云、稱、業平は在原の五男なる故に如此云也。私云、此事不審、業平は阿保親王の四男也。第一の兄は大江音人とて在原氏に非ず。蓋了簡を加ふるに、阿保親王子第一は三歳にて死し給ふ。第二は五歳にて死し給ふ。第三行平、第四守平、第五は業平也。此時は大江音人は他姓に見るべし。

むばらからたちにかかりて　むばらは茨也。からたちは棘也。

さむしろに　今夜もや今夜もやと幾夜もかさねたる心あり。

とよみけるををとこあはれと思ひて　光、ここは女を哀と思ふなり。

昔をとこ女みそかに云云　いづくなりけむ　何としたる事にやとあやしきと也。

吹くかぜに　何とてみそかにかたらふ事もなきぞと、心中がみたきと也。

入べき物をと云ふ結句妙也。物をと云ひて心を殘したる、切なる心あり。能思ふべしとぞ。物をと云にて我思の自在ならざるを云也。

むかしおほやけおぼして云云　殿上にさぶらひけるありはらなりける男のまだいとわかかりけるを　女いとかたはなり　痛醜。眞名伊勢物語如斯

思ふには　光、大方に思ふ事は忍ばるる也。切に思ふ事はしのぶる事がま